

二〇世紀前半の華西辺疆研究と華西学派

一九二二年、四川成都に創立されたミッション系の華西協合大学は、布教のために人類学・社会学の人材を育成し、華西辺疆研究学会を設立して英文学会誌を刊行し、世界に向けて中国西南辺疆部の情報を発信した。一九三〇年代の抗戦期、成都に避難してきた人類学者たちはこの学会に集結し、康藏地区を中心にフィールドワークを行い、大きな成果をあげた。彼らを「華西学派」とよぶ。

李紹明〈四川省民族研究所研究員〉 冉光榮〈四川大学歴史文化学院教授〉 李錦〈四川大学中国藏学研究所・歴史文化学院教授〉

石碩〈四川大学中国藏学研究所・歴史文化学院教授〉 楊天宏〈四川大学歴史文化学院教授〉 羅中枢〈四川大学公共管理学院教授〉 劉志揚〈中山大学人類学系教授〉 袁曉文〈四川省民族研究所所長〉

汪洪亮〈四川省師範大学歴史学院教授〉 耿静〈四川省民族研究所研究員〉 王田〈西南民族大学副教授〉 周蜀蓉〈四川大學博物館教授〉 鄒立波〈四川大学中国藏学研究所副教授〉

張琪〈四川大学助理解研究員〉 李沛容〈四川大学中国西部辺疆安全與発展研究中心特聘副研究員〉 整理 松岡正子〈愛知大学現代中国学部教授〉 (訳 松岡正子・飯田直美)

二〇一八年四月二三日、成都の四川大学

学で、学術シンポジウム「二〇世紀前半の華西辺疆研究と華西学派」が開催された。テーマは、午前が「一九二〇〜四〇年代の人類学華西学派の学術体系研究」(二〇一七年度国家社会科学基金重大招標項目)、午後は「二〇世紀前半の華西

辺疆研究と華西学派」である。

シンポジウムでは、まず、李錦が「人類学華西学派の研究」の概要を説明したうえで、専家組の冉光榮、趙心愚、羅中枢、袁曉文、楊天宏らがこれに対して意見と提案を述べた。次に、華西学派への提言をふまえて、二〇世紀前半の華西辺

疆研究について各自が研究の視点を報告した。内容は五つに分かれる。

一は「基調論説」で、李紹明「中国人類学における華西学派」(二〇〇七年)である。

二は「シンポジウムの目的」で、李錦「人類学華西学派の研究」と松岡正子「二

○世紀前半の華西边疆研究と華西学派」。

三は「華西边疆研究と華西学派研究の意義」である。まず冉光榮「華西学派における研究対象と地域、時代」が華西学派研究に対して三つの提言を行う。次に

石碩「西南研究と華西学派」が、華西学派の西南民族研究は、中国人類学においてヨーロッパの人類学に基づいてなされた最初の系統的な少数民族研究であるとし、人類学史上の重要性を指摘する。楊

天宏「边疆服務と華西学派」は、華西边疆研究学会とともに華西民族研究を行ったキリスト教会の宣教師や一九三九年に設立された边疆服務部の調査記録の重要性と欠点を明らかにする。羅中枢「中国边疆学構築に対する華西学派の示唆」

は、边疆学の視点から華西学派の今日的意味を論じ、「边疆」について考察する。劉志揚「梁釗韜と南方民族および移民研究」では、中山大学と西南人類学研究との歴史的な関係を指摘し、梁釗韜の功績について、「西南民族分布と分類略図」、民族考古学の創始者、南方民族の移動研究をあげる。汪洪亮「華西学派の

特徴」は、華西学者が边疆研究で果たした実地調査に基づく理論構築の水準と応用実践の深さを指摘する。

四は「華西学派研究の諸テーマ」で、冉光榮「胡鑑民と四川大学の民族学」、耿静「グラハムのチャン族研究」、袁曉文「西南藏族研究」、王田「民国期の四川西北地区におけるアヘンの栽培売買と族群政治——雅谷脑河流域を中心に」、周蜀蓉「華西边疆研究学会雑誌」の諸篇

一 基調論説

中国人類学における華西学派

李紹明

人類学は、総じて人文社会科学に属し、この百年の間に海外から導入された科学分野である。国内ではすでにかなり発展し幾つかの学派が形成されている。人類学は、学術的伝統と慣例によって、

によって、本テーマの展開の可能性を示した。

五は「華西学派の学術体系」で、張琪「人類学「華西学派」の理論体系の現状と方向」、李沛容「人類学・社会学の教学実践からみた民国期の四川大学と華西学派の関係」、鄒立波「華西学派と嘉絨研究」によって華西学派の体系に関わる諸要素を提示した。

イギリスやアメリカなどでは形質人類学、文化人類学（社会人類学あるいは民族学）、言語人類学、考古人類学の四つに分類されているが、ヨーロッパ大陸では形質人類学のみを指し、民族学や言語

学、考古学はこれと同列とされる。中国では、人類学は双方から導入されたために二つの体系が併存し、学界では厳格な区分はない。しかし、学科体系（一、二、三級に分かれる）では、人類学は社会学科（一級学科）の下位に属するのに対して、民族学は民族学科（一級学科）の下位に属しており、明らかに整合性に欠ける。本稿で述べる中国人類学華西学派は、イギリスやアメリカとの関係が密であるため、四大分類の区分に従う。

一 問題提起

中国人類学の学派問題については、前世紀末からすでに議論があった。黄応貴「光復後台湾地区人類学研究的發展」や龍平平「旧中国民族学的理論流派」は、ともに「南派」と「北派」に分けて論じる。⁽¹⁾黄淑娉・龔佩華『文化人類学理論方法研究』は次のように明確にのべる。⁽²⁾

民国期、中国人類学には研究の主題と理論の違いによって二種の型があ

り、「南派」「北派」とよばれた。南派は、三〇年代に南京の中央研究院民族学組や南方の複数の大学の人類学者たちを代表とし、早期に進化論派の観点を一部取り入れ、後にアメリカ歴史学派の影響をより多く受けて、中国の伝統的歴史考察法と結びつけた。相対的に言えば、理論をあまり重視せず、資料の収集と説明に偏る傾向がある。中華民族の文化にも進化の過程があり、その歴史を研究すべきであって、人類学の手法は中華民族の文化史を再考するため必要であるとした。まさに蔡元培が「中国歴史上の断片的事実については、我が国の先史学はまだ十分に發展していないため証明することはたやすくはない、しかし民族学において何らかの傍証が得られれば明らかにできることは少なくない」と言ったとおりである。——彼らの少数民族に対する実地調査は、内容の多くが伝統的な文化習俗の記録や叙述であり、民間文学や神話、伝説故事などの収集に重点を置くものもある。しかし、理論を軽視

するため、論者は常に大量の資料の積み上げと煩雑な現象の羅列であり、研究する社会やその文化發展の本質的な問題は説明できていない。——アメリカ歴史学派では、民族誌資料は理論的指標とは関係なく収集し、有用な資料であれば理論問題に対して明確な答えが得られるとする。南派は中国の歴史学派ともいわれ、理論的指標をあまり重視しないという点ではアメリカ歴史学派と同じである。アメリカ歴史学派は、研究対象の族群とその文化の歴史的發展についての研究を重視しないが、中国の人類学者は、人類学の方法によって歴史文献を研究すると同時に、一定程度において歴史資料を利用して人類学研究を進める。このような研究法は後の中国人類学研究において一層進められ、現状研究のために歴史の發展過程を遡り、現存の社会や文化の由来を説明する。⁽³⁾

北派は、燕京大学社会学系をベースに、呉文藻を筆頭とする人類学者を代表とする。理論を講じ、応用を重ん

じ、中国化された人類学の学術思想を明確に示す。呉文藻は一九二九年にアメリカ留学から帰国後、人類学や社会学をいかに中国の国情に結びつけるかという問題に取り組んだ。文化人類学の教学を改革して文献と民族学の資料を用いて授業を行い、人類学は対象を原始民族から現代民族に拡大し、漢族を含む中華民族全体とすべきであると主張した。また、応用人類学を理論の基礎とする機能学派理論を、中国の国情を研究するのに最も適しているとした。一九三五年、ラドクリフ・ブラウン (Alfred Reginald Radcliffe-Brown, 1981-1995) を講義に招き、機能学派の理論と方法を広める一連の文章を書いた。また費孝通や林耀華、李有義らを派遣して江西省大瑶山花藍瑶の社会組織、江蘇省江村の経済、福州義序の宗族制度および華北や山西などの村落調査を行わせた。中国式の人類学や社会学を「中国の土壤に植え付け」⁽⁵⁾「中国化を徹底する」ことを提起した。

中国人類学の南北両派に関して、大陸の学者は一般に一九四九年中華人民共和国建国以前に遡るが、台湾の学者は一九四九年以降のかなりの期間まで延長して論ずる。李亦園はいう、「台湾の人類学研究は、一九四九年から一九六四年までは大陸時代の南派の伝統の継続といえるが、一九六五年以後は伝統的民族誌から社会人類学に向かう流れが出現し、その特徴は漢族の郷村社区の研究ブームという形であられた。一方、大陸では、北派の学者が少数民族の社会歴史研究に転向した、……南北両派の伝統の相互作用である」と。これは引き続き検討すべき問題である。

では、中国人類学には南北両派以外に他の派はないのだろうか。知られているのは、曾昭璇が曖昧に提起した「嶺南学派」のみである。曾によれば、「梁釗韜教授の業績は嶺南学派の新風による。中国の民俗文化は明清以後、中心が南に移り、「嶺南親海、熱帯民風」の嶺南文化が盛んになった。地理的には一年を通してフィールドワークが可能であり、加えて

西洋の学問が伝えられたことで、嶺南学派には長期のフィールドワーク、広い学識、新説の創出という三つの優れた点がある」という。ただし彼は、中国人類学の嶺南学派を提唱しているわけではなく、梁先生が嶺南学派の影響を受けて業績を為したことを主に述べているだけである。個人的には、中山大学や廈門大学を代表とする嶺南人類学は長い歴史があり、学风は実務を重んじ、多くの人材を輩出して多大な貢献があり、特色が際立っていると思う。これを南派から分けて単独の別一派とみなすことができるか否かは、中国人類学の歴史を研究する者にとって回避できない重要な問題である。

中国人類学に華西学派は存在するのか、これは王銘銘が以前から提起している問題である。二〇〇六年一〇月、王銘銘は北京大学と中央民族大学の人類学民族学を専攻する大学院修士学生を率いて成都を訪れ、「西南地区民主改革口述史」を作成するために幾度か私を取材した。そのなかで、中国人類学に華西学派が存在するか否かをたびたび聞いてき

た。私は、この学派は客観的にみて存在するが、まだ研究が不十分だと答えた。次に彼は、この学派にはどんな特徴があるのかと聞いたので、私は簡単に「全てを取り入れていること」だと答えた。南北の両派の良いところを備えており、特にチベット族についての人類学的研究では抜きん出ている。さらに彼は北京に来てこれについて一、二回講義をしてほしいといったので、私は学術資料を再び整理しなおして、翌年には講義ができるように準備を進めた。

私自身も、この問題についてかつて考えたことがなかったわけではなく、あえて問題提起をしなかっただけである。というのは、一に、私はこれについて十分研究しておらず、今でもなお疑問が完全に解決できていないからである。二に、私自身が華西大学の出身であるため、この学派を論じれば自画自賛の可能性があったからで、あえてこれまでこの話題を避けてきた。しかしいまや正式に私に意見を求める学者があり、避けることはできそうにもない。またほかの理由もあ

る。それは華西における人類学が一時は世人の関心を得たのに、これまでこの学派に関する研究や論述がなく、もしこの学術的伝統が受け継がれなければ、四川や西南の人類学に直接的な影響があると思えるからだ。一例を挙げよう。昨年、王笛著『街頭文化——成都公共空間、下層民衆與地方政治（1870-1930）』を読んだ。これは、彼がアメリカで二〇〇三年にスタンフォード大学出版社から出版した英語版（Di Wang, *Street Culture in Chengdu: Public Space, Urban Commons, and Local Politics, 1870-1930*, Stanford University Press, 2003）の漢訳本である。王笛は四川大学歴史系と同修士課程を修了して大学に残り、後にアメリカで博士号を取得した。その博士論文を基に著した本の「中文版自序」において、「デイビット・グラハムを探して」という小題をつけて、著書で使ったグラハム（すなわち葛維漢 David Crockett Graham, 1884-1961）の三枚の絵について次のように説明する。「版權許可を得るために、わずかな手をかりをたよりに、多くの時間をかけてア

メリカの各図書館の資料庫を探し、後にインターネットも用いてやつとこの人物をつきとめた。……三十種余りの作品には、すでに印刷されているもの、博物館に所蔵されたもの、雑誌に発表されたものもあった。多くは四川に関係し、内容は大衆の宗教、風俗、民歌、方言、考古、少数民族などに及ぶ。誉れ高いスミソニアン学会（Smithsonian Institution）の刊行物に発表されたものもある。そしてようやく、デイビット・グラハムが非凡な学者であり、その関心と知識が広範で、成果も多いことを知った。私は四川を専門に研究する学者として、彼のことをこれまで全く知らなかったことが大変遺憾であり、またこのような四川の宗教研究に重要な貢献をしたアメリカ人とその著作がほとんど世に知られることなく埋もれていることが非常に残念である⁽⁸⁾」と。王笛のこの自責の念に、私は感動した。これは学者の心からの正直な声である。しかしこのことは私を驚愕させもした。王笛は、かつて四川大学の歴史系で近代史を学び、四川大学で働いた。一

方、グラハムは四川で三八年間暮らし、

長年、華西大学博物館（四川大学博物館の前身、一九五二年に四川大学歴史系に吸収された）に勤務して館長兼文化人類学教授を務め、一九四八年の退職後にアメリカに帰国するまで多くの著作を世に出した。四川大学関係者である王笛が、グラハムがどういう人物なのかを全く知らず、アメリカ留学中に四川を研究した著名な学者であることをようやく知った。王笛ですらこのようであるから、他はいうまでもない。しかしこの事実で王笛を責めるべきではない。これは我々の文化の断層と、學術継承の断絶の深刻さを明らかにしたに過ぎない。私は一人の学者としてこのことに責任があり、學術継承の問題を研究するに至った。そして、まさに王笛がグラハムの著作を埋もれさせたくないと思んだのと同じ思いで、グラハムの在華時の人類学の代表作を収集整理翻訳し、二〇〇四年『葛維漢民族考古学論著』を出版し、その他の彼に関する専門書も現在整理翻訳中である。これは先達の研究についての後人へ

の引き継ぎでもある。

二 中国人類学華西学派の形成と発展

学派とは學術の流派である。一般に、ある学問のなかで学説や師の教えの違いにより形成される。広義には、ある地域やある問題を研究対象として、特色のある學術伝統等を形成した場合も学派と称する。前述の嶺南学派がこの例である。

学派は自ら称するのではなく、研究者が學術の実践で次第に自身の特色を形成し、それに対して学界がある種の學術グループとして認知する。人類学の南北派も同様である。我が国の歴史には早くから学派があり、同じ志をもつ学者が集まって学問を興した。「君子群而不党」（君子は群れて党せず）を提唱し、「党同伐異」（同じきに党がり異なるを伐つ）の現象を退けるのも學術の民主的精神である。これは今日の学派が提唱する学风とも一致する。

ここでは、まず、中国人類学の華西学派がなぜ「華西」の名を用いるのかを説

明せねばならない。ここでいう「華西」とは中国西部（West China）ではなく、一九一二年に成都で創設された華西協合大学を指す。華西協合大学は、華西大学とも略し、校地は華西壩あるいは壩上と呼ばれる、現在の四川大学華西校区にあった。華西協合大学は、創立後まもなく人類学と社会学の教学と研究を進め、人類学を主な内容とする博物館（館）をつくった。一九二二年には華西边疆研究学会を設立して、一九二四年に『華西边疆研究学会雑誌』を刊行、一九四二年には専門的な人類学研究機関である華西边疆研究所を設立し、人類学の人材を輩出した。さらに、抗日戦争時期に東北、華北の沿海地区が相次いで陥落すると、多くの大学機関が内地に移転し、そのうち燕京、齐鲁、金陵などミッシン系を中心とした六つの大学が成都の華西壩に集まって華西大学と共同で授業を行った。多くの著名な人類学者が華西の列に加わり、華西人類学が盛んになった。これらの、当時、成都華西壩にいた人類学者集団が「華西」の名でよばれ、俗称となっ

た。なお、我々が用いる華西学派には、当時成都にあった四川大学などの人類学と社会学の学者も含まれる。

華西学派の形成と発展には、華西大学の設立が密接に関係する。華西大学は、アメリカ、イギリス、カナダの三カ国のキリスト教の五つの教会が連合して成都に創立した大学である。一九〇五年に創設が計画され、一九一〇年に学生を募集した。新設時は文系理系の二学系のみであったが、続いて医学、薬学、教育(師範)学などの学系が増設された。一九一七年以前の華西大学文科(人文科学と社会科学の略称)には、哲学、教育、西洋史と総合文化など五つの学系がある。また、大学は人類学と社会学の教育にも力をそそぎ、哲学系と西洋史学系には「人類及び人種学」の課程、理科生物学系にも「人種及び人類学」の課程、総合文科系には「社会学」の課程が設けられた。これらの課程の担当は主に外国人教師であった。このほか人類学の機関として博物館(一九一四年創設時は博物部)があった。文科修士と理科博士課程はダニエル・

シート・ダイ(戴謙和 Daniel Sheets Dye, 1884-1977)が部長で、トーマス・トールランス(陶然士 Thomas Torrance, 1871-1959)とジェームス・ヒューストン・エドガー(葉長青 James Huston Edgar, 1871/1872-1936)が補助にあたった。彼らは人類学に考古学と文化人類学を開設した。トールランスとエドガーは何度も康巴藏族地区、すなわち現在の「藏彝走廊」地区に行つて考古と民族の調査を進め、様々な著作を世に問い、『華西边疆研究学会雑誌』上に何篇もの論文を発表した。華西大学博物館は、当時は「大学博物館」、考古学及び人類学博物館、古物博物館とも呼ばれた。理科生物学系に設立された自然歴史博物館や医学系の医学博物館と区別するためである。

次に、四川人類学の発展に多大な貢献をした、アメリカの人類学者デイビット・グラハムを紹介する。彼は一九一二年から一九三一年まで宣教師の身分で四川省宜賓市に住み、教会活動をしながらか人類学の調査研究を行った。四川各地を幾度も調査し、研究領域は四川南部の

ミャオ族の文化と生活、「彝人懸棺」(長江沿いの岸壁に棺を並べて埋葬し、「彝人」とよばれた古代人)の民族と考古、漢族地区の民間の宗教信仰、四川西北の西南チベット族、チャン族、彝族の歴史と文化等に及び、多くの論文を発表した。一九三二年には華西大学博物館館長に任命され、一九四八年に退職してアメリカに帰国するまで文化人類学教授と兼任した。華西大学博物館館長に在任中の一九三三年には、四川広漢三星堆遺跡の考古発掘の責任者となり、古蜀三星堆文化の研究の道を開いた¹¹⁾。

四川における人類学研究は、当時、このような背景のもと、一九二二年三月、外国籍学者が主となって、人類学研究を中心に地理学、地質学、生物学などの学科を含む国際的學術組織、「華西边疆研究学会」(West China Border Research Society)が華西大学に設立された。学会は華西大学に属し、事務機構は華西大学博物館内に設けられた。構成員は当時一人で、ほとんどが華西大学関係者である。責任者はアメリカ国籍の形質人類学

者で解剖学者のウィリアム・レジナルド・モールス（莫爾斯 William Reginald Morse, 1874-1939）で、主なメンバーはダニエル・シート・ダイ（戴謙和）、エドワード・コリー・ウィルフォード（胡祖遺 Edward Cory Wilford）、A・J・ブレイス（布札士 A. J. Brace）等で、ロンドン王立協会会員で著名な地理学者エドガー（葉長青）を榮譽会員に招聘した。学会の主旨は華西（四川、雲南、貴州、チベット、甘肅などの地を含む）の民族の風俗習慣や自然環境の研究の支援と奨励であり、特に外国人に大きな影響力があった。華西地区の社会と自然の研究成果を発表し、西南地区を調査研究の重点領域とした。調査の支援、経費の援助、報告会の実施、論文の発表、学会誌の発行などの活動を行った。学会誌『華西边疆研究学会雑誌』は英語で出版され、一九二四年に創刊、一九四六年に停刊するまであわせて一六卷二二冊を出版し、論文は三〇〇余篇に及ぶ。内容は主に西南地区に関する人類学（形質人類学と、民族学、考古学、言語学、文化人類学を含

む）、歴史学、民俗学、社会学、宗教学、地理学、地質学、生物学などの分野の論著で、このうち人類学の成果は約三分の一を占めた。当時この地区を研究する学科のなかでは世界的な権威のある刊行物となり、世界各国の大図書館に收藏された。論文の著者は大多数が国内外の著名な学者である。なお一九四〇年以前は、著者は外国籍学者が主だったが、その後は中国の学者が主力となった。これは我が国における一連の学科発展の趨勢と一致する。本誌はすべて英語で出版されたため、当時は国外への影響が国内よりも大きかった。

一九二〇年代の華西人類学界で最も突出した人物はグラハムである。『華西边疆研究学会雑誌』に五五篇の論文を発表し、内容は主に文化人類学、考古学、民俗学と宗教学などの多方面にわたる。次いでエドガー（六七篇）であるが、彼の主な貢献は人類学分野ではない。形質人類学分野では、モールスの貢献が大きい。同学会誌に何本もの論文を発表し、その蓄積が一九三〇年代の三度にわたる四川

各民族の血液型調査の基礎となった。

中国人類学の発展の歴史について、アメリカのステバン・ハレル（Stevan Harrell, 1947-）を代表とする人類学者たちは、一九二〇年代中期以前、中国には人類学はなかった、中国人人類学者がまだ成熟していなかったからであるとする。確かにハレルの説はもつともであるが、物事の発展には過程というものがある。華西における人類学では、当時中国の学者はまだ主たる地位を占めてはいなかったが、多くの外国籍の学者がこの地で事業を推進するなかで、幾人かの中国人もこの事業に参加して訓練を受けた。これは中国人類学の発展の一部分であり、一段階とみなすことができるのではないか。私は、一九二〇年代とそれ以前の時期は中国人類学華西学派の萌芽期であり、準備時期または蓄積期間であると考え。当時は学者たちの学術背景もそれぞれ異なっていた。例えば、グラハムはアメリカの著名な人類学者フランク・ボアズ（Franz Boas, 1858-1942）の影響を深く受け、グラハムの著作や華西

大学博物館の展示にはアメリカ人類学歴史学派の観点と方法が色濃くみられ、歴史学派の学者とみなすことができる。また、トールンスはその代表作「羌族の歴史、習俗和宗教」のなかで、チャン族の原始多神信仰を原始一神教の古い信仰であると解釈したが、これはほぼウィルヘルム・シュミット (Wilhelm Schmidt, 1868-1954) の文化伝播学派の観点の模倣といえる。ただし、これらは当時の華西ではまだ絶対的な影響力を持っていなかった。

一九三〇〜四〇年代の中国は揺籃期であったが、この時期の混乱は中国華西人類学に形成と発展の機会をもたらした。一九三一年、日本軍国主義が中国を侵略し、同年の満州事変で日本は中国の東北三省を占領し、続いて偽満州国の傀儡政権を作り上げた。民族の危機は日増しに顕著となった。その後、一九三七年日本軍は盧溝橋事件を起こし、公然と中国を侵略して日中戦争が勃発し、中国人民は全面抗戦の時期に入った。日本軍は徐々に我が国の東北、華東、華中、華南一帯

を占領し、中国政府が管理可能な地域は西北と西南の二カ所のみとなった。西部地区は中国少数民族の居住地区であったが、民族間の矛盾が著しく、日本はこれに乗じて民族関係を挑発することで全面的に中国を併呑しようとした。しかし、これは人類学研究が能力を発揮する好機でもあった。加えて、我が国の大部分の国土が陥落すると、陥落区の大学が次々と内陸部に疎開し、西部の中央に位置していた成都にも外地の大学が移転してきた。これらの大学には人類学や社会学の人材が多く、彼らが華西人類学発展に新しい力を注ぎこんだ。

一九三七年抗日戦争勃発後、成都華西に移ってきた大学は南京の金陵大学、金陵女子文理学院、中央大学医学院、北平（現在の北京）の燕京大学、協合医学院および看護専門学校、済南の齐鲁大学、蘇州の東呉大学生物系等である。これらの大学は華西大学と連合して学校を運営することで、経費や教員費、校舎の設備などの問題を解決した。華西大学はこれらの大学のために多くの支援を提供し

た。また教師などの学術的資源を華西大学に集中させて相互活用したことで、華西および各大学の教育と科学研究の水準が向上した。移転してきた大学のうち金陵、金陵女子文理、燕京、齐鲁の四校にはいずれも社会学系があり、社会学、人類学課程が開設されていた。人類学分野で著名な徐益棠（一八九六—一九五三）、柯象峰（一九〇〇—一九八二）、馬長寿（一九〇七—一九七二）、林耀華（一九一〇—二〇〇〇）、李有義（一九二一—（短期）および陳永齡らは、この時、華西人類学の発展に重要な貢献をした。例えば、金陵大学の徐益棠は金陵大学社会学系の教授兼中国文化研究所所長であり、当時、中国民族学会の責任者でもあった。金陵大学移転に随行して成都にきて以来、所属機関の諸活動を華西で行った。中国民族学会は、成都において西南边疆研究社の名義で『西南边疆』を刊行し、金陵大学中国文化研究所も『边疆研究論叢』を出版した。著名な学者の何人かはたびたび学生を連れて四川や西康両省のチベット、イ、チャン、ミャオ

などの民族地区で人類学のフィールドワークを行い、一連の代表的な専門書を書きあげた。徐益棠の『雷波小凉山之俾民』¹⁵、馬長寿の『嘉絨民族社会史』¹⁶「鉢教源流」や『凉山羅彝考察報告』¹⁷、林耀華の『凉山夷家』¹⁸『四土嘉絨』¹⁹、李有義の『雅谷腦的漢藏貿易』や『雅谷腦喇嘛寺的經濟教育組織』¹⁸など、みな当時のフィールドワーク研究の優れた成果である。

華西大学自体も、抗戦期に人類学が急速に発展した。人類学と社会学の研究者の李安宅（一九〇〇—一九八五）は一九四一年に華西大学社会学系教授兼任主任として招かれ、一時期は移転した成都の燕京大学社会学系主任も兼任して、華西の人類学研究を強力に促進した。河北省遷西の出身で、齐鲁大学と燕京大学で学び、一九二七年に燕京大学社会学系で教え、一九三四年にアメリカで人類学を修め、翌年にニューメキシコ州のインディアン部の部族をフィールドワークして『印第安人祖尼的母亲制度』²¹を著し、アメリカの少数民族を实地研究した最初の中国人となった。また多くの人類

学の著作執筆と翻訳で賞賛された。¹⁹一九三六年に帰国して燕京大学で教え、一九三八年に夫人の于式玉（一九〇四—一九六九）とともに甘肅省南部蔵区のラプラン寺を三年間調査し、英語で『蔵族宗教史之实地考察』²⁰を著した。一九四一年に華西に来てからは、人類学と社会学の教育と研究をしながら、人類学研究所の専門機関の設立に着手した。翌年華西边疆研究所が設立され、華西大学校長が所長を兼任、李が副所長で実務を取り仕切った。同研究所は西南边疆民族、特に康蔵地区（現在の「蔵彝走廊」地区）を対象とする人類学研究組織であり、任乃強（一九四—一九八九）、謝国安（一八八七—一九六六）、劉立千（一九一〇—二〇〇八）、于式玉、玉文華などを主任研究員として招聘した。うち任、謝、劉等何人かは当時すでに著名な康蔵研究者であった。これに、華西大学社会学系の馮漢驥（一九九—一九七七）、羅榮宗、蔣旨昂や、鄭德坤など人類学者が加わって、勢力はかなり拡大した。

また、華西边疆研究所と華西大学社会

学系はたびたび専門家を招いて學術講座を開いており、グラハム、ダイ、李安宅、林耀華、馮漢驥が主要な講師陣であった。華西边疆研究学会と華西大学社会学系は一九三三—三四年に、川西黒水地区と西康北部徳格一帯にそれぞれ人を派遣してチベット族やチャン族のフィールドワークを行った。その後、李安宅が「西康徳格之歴史與人口」「喇嘛教薩迦派」²¹「笨教——説蔵語人民的魔力的宗教信仰」を執筆し、任乃強は「徳格土司世譜」「喇嘛教與西康政治」²²を書いた。蔣旨昂の「黒水社区政治」²³、于式玉の「麻窩衙門」「黒水民風」²⁴などのフィールドワークの研究成果は、当時の人類学調査研究の空白部分を埋める著作である。華西边疆研究所では謝国安、劉立千などの蔵文漢訳の名著『蔵王世系明鑑』『瑪巴訳師伝』『米拉熱吧大師伝』『印蔵仏教源流史』や、玉文華が収集整理した『西北民歌』などを出版した。

華西大学やその他の人類学に関する機関およびその事業は、この時期に大きく発展した。華西大学博物館は一九四一—

四六年に鄭德坤が館長となった。彼は著名な文化人類学者で考古学者でもある。着任して間もなく中山大学の梁釗韜（一九一六—一九八七）を招聘した。その後、宋蜀華（一九二二—二〇〇四）も留学から帰国して同館の職に就いた。同館の所蔵品は、鄭の指導の下で考古学、民族学、民俗学に基づいて陶器、石刻、書画などに分けて展示され、現在の展示構成に至る。五年の在任期間に、漢墓、唐墓、前蜀永陵を含む成都の文廟跡の考古学的な発掘を四回組織し、叢刊五種、專刊一種、謄写版叢刊九種を出版した。彼自身は専門書『四川古代文化史』²⁶や、中国史前史、川西北石棺葬、古代陶器、チベット民族文化、チベット絵画などに関する論文を多く著した。梁釗韜はこのとき博物館の民族研究室を取り仕切っており、『西南民族誌』を主編して二百余万字の資料を収集した。また多くの論文を執筆し、「祭祀的象徴和伝襲——民族学的文化史研究」「古代醜性祭器及祖先崇拜」²⁶などは大きな影響を与えた。

形質人類学の分野でもかなり大きな成

果があった。一九三五—三六年に華西大学医学院の楊振華は、モールス主催の形質人類学の調査に三度参加した。成都人千人とミャオ族約二百人、チベット族約百人、チャン族約五十人の血液標本を収集し、論文「四川人的血型研究」を書いた。一九三八年にモールス、楊振華、白英才（一九〇七—一九五二）の三者連名で『イギリス人類学雑誌』に発表し、賞賛を得た。顔閭は華西の形質人類学に必要な貢献をした。彼の著作「中国人鼻骨之初歩研究」と「測定顔孔前後位置之指数」²⁷は当時独創的な論文と評された。

言語学研究の分野では、一九四〇年華西大学に設立された中国文化研究所は言語学者の聞宥（一九〇一—一九八五）を所長とした。聞宥は中山、山東、燕京、四川、雲南などの大学教授を歴任し、言語学、音韻学研究を専門とする。特別研究員には呂淑湘（一九〇四—一九九八）、韓儒林（一九〇三—一九八三）、劉朝陽、董作賓（一八九五—一九六三）、劉咸、李方佳等がいた。同研究所には『華西大学中国文化研究所論叢』『華西大学

中国文化研究所集刊』の二種の出版物があり、国内外に名声を博した。聞宥の「論民族語言系属」「民家語中同義字研究」「羌語比較文法」、呂淑湘の「积俺附論們字」²⁸「説漢語第三代身詞」、李方佳「沙仏、漢藏語元音」²⁹、董作賓「説方編納西文字典甲種」、劉念和「中国古漢語声韻系統的研究」などは、すべて言語学の佳作と称された。その他、聞宥には『古銅鼓考』²⁸「銅鼓統考」などの専門書がある。一九四〇年代には趙衛邦（一九〇八—一九八六）が加わり、西康寧属（現在の涼山彝族自治州）²⁹一帯の民族調査を進め、「西康会理の彝人」²⁹を著した。

成都華西壩の大学や研究機関のほか、四川大学や四川博物館なども人類学の分野で目覚ましい成果があった。一九三一年、成都にある国立成都大学、国立成都師範大学、公立四川大学の三つの大学が合併して国立四川大学となり、合併後は社会学や人類学の教育と研究に最も重点を置いた。一九三五年、四川大学文学学院の歴史系は人類学を開設し、法学院の政治経済系でも社会学、社会問題など

の課程を開設した。これらの課程を担当したのは胡鑑民（一八九六一一九六六）と馮漢驥であった。彼ら二人は華西の大学研究機関と密接な関係があり、胡はかつて金陵大学文学院文科研究所の教授で、馮は華西大学社会学系教授および主任代理であった。馮は後に四川博物館館長を務め、また華西大学と四川大学の教授も兼任した。このため彼らの人類学活動は華西と切り離すことはできない。

胡は一九二二年にフランスのストラスブール大学社会学部で修士の学位を取得し、一九三一年帰国後すぐに四川大学教員となり、社会学と人類学の課程を担当した。四川や貴州の民族地区に赴いて何度もフィールド調査を行った。主な論文に「羌族之信仰與習為」「羌民的經濟活動型式」「苗人的家庭與婚姻習俗瑣記」などがある。馮漢驥は一九三一年にアメリカのハーバード大学研究院人類学部に入り、後にフィラデルフィアのペンシルベニア大学人類学部に移って一九三六年に人類学哲学博士を取得した。翌年帰国し、四川大学歴史系の教員となり、考古

学、民族学の教育と研究に従事した。何度も四川西部のチベット族、チャン族、彝族地区でフィールドワークを行い、前蜀永陵の発掘も含め幾度も考古発掘を主宰した。主な著作に「由中国親族名詞上所見之中国古代婚姻制」（一九四一年）、「僦僕之歴史起源」（シュライオック、Shrockとの共著、一九三八年）、「成都平原の大石文化遺跡」（鄭徳坤との共著、一九四六年）、「川康明清土司官印考」や「松理茂汶羌族考察雜記」などがある。

四川大学文科研究所の張怡蓀（一八九三—一九八三）は一九三〇年代から『蔵漢大詞典』の編纂に尽力し、注目された。他に抗戦時期に四川梁山に移った武漢大学の方壮猷（一九〇二—一九七〇）は人類学の分野で優れた著作がある。川南小凉山彝族地区に調査に赴いて、「雷波屏山沐川等県土司家譜」「蛮夷司等九土司家譜」「凉山羅族系譜」などを著し、注目された。なお、当時四川には、このほかに重要な人類学研究機関が置かれていた。例えば、疎開して宜賓李莊に設立された中央研究院歴史語言研究所民族

学組および重慶の人類学者たちはこの時期に著しい成果をあげたが、華西との関係は比較的疎遠なので、本研究には収めない。

一九四五年八月、日本が降伏して抗戦は終結した。四川に疎開していた多くの大学等が次々に成都を離れ、華西にもある程度の影響はあったが、すでに確立されていた華西人類学は引き続き発展し、華西の各人類学機関は継続して各自の教学と研究に従事した。一九四六年に『華西边疆研究学会雜誌』が様々な原因によって活動停止となった後、華西边疆研究所の任乃強、謝国安、劉立千らはすぐに成都に康蔵研究社を立ち上げて『康蔵研究月刊』を創刊し、一九四九年まであわせて二九期を出版し、人類学会に大きな影響を与えた。また、一九四七年には四川大学と華西大学の人類学の教師や学生が胡鑑民や羅榮宗らの支持をうけて、四川大学边疆研究学会を立ち上げた。『中国边疆』（隔週刊）を作り、成都の『西方日報』副刊という形で出版して、一九四九年四月までに三二期を刊行し

た。四川大学文科研究所の唐嘉弘と董其祥の論文が多く収録されている。一九五〇年に『西方日報』が停刊すると、当学会は成都の『工商導報』に不定期で『西南边疆』（特集）を刊行し、一九五一年まで続けた。このように、当時の成都の人類学は非常に活発であった。

一九四九年一〇月中華人民共和国が成立し、一九五〇年に華西大学社会学系は正式に社会学、民族学の二つの専攻学科を定め、新中国建国後最初の大学本科学を募集した。人類学は、新中国の各民族と民族工作のために尽くすという方向へ踏み出した。李安宅は謝国安、劉立千、于式玉および一部の社会学系学生を率いて、中国人民解放軍第一八軍に参加し、チベットに進軍してチベットの平和解放の事業に身を投じた。任乃強らは康蔵民族地区開発工作のために研究資料を提供し、博物館の宋蜀華は政務院文教委員会チベット科学工作隊に参加し、チベットに赴いて活動した。しかし、一九五二年の院系調整に伴って華西における人類学各機関の活動が中止された。ただし文化

人類学は民族学の名で保留され、ソ連のソビエト民族学派の改造を受け、継続して役割を果たした。考古学と言語学は独立した科学として存在し続けたが、形質人類学の研究は停頓した。ここに、中国人類学の華西学派は中国の學術舞台から姿を消したのである。

以上によれば、華西人類学派の歴史は大きく三段階に分けられる。第一段は萌芽と創立で、一九一〇―三七年まで、第二段は形成と発展で、一九三八―四五五年まで、第三段は継続発展で、一九四六―五二年まで。中国人類学華西学派は、一九五二年以降は基本的に「歴史」となり、中国學術史上では一九一〇―五二年までの約四二年間存在したといえる。

三 中国人類学華西学派の特徴

一般に、学派の違いは、主にその理論と方法によるが、同時に研究対象、範囲や組織などの面も考慮しなければならぬ。中国人類学は、この百年の間に海外から導入された科学であり、国外の各派

の人類学は様々なルートで中国に伝わり、中国人類学の発展に影響した。中国人類学の南派は、歴史学派といわれ、北派は機能主義派といわれる。一九五〇年代以前の中国人類学の有識者は、たゞたゞ「中国化」を強調してその実施に力をいれた。しかし欧米人類学が徹底的に否定された一九五二年の院系調整以前は、先天的な不足と後天的な限界のために、中国人類学はすでに厳格な意味で自身の學術流派を打ち立てたとはいえない。そのため、ここでいう中国人類学の流派とは、示されるいくつかの相違点から、広義の概略を述べるに過ぎない。その意味で言えば、中国各地における人類学の伝統と実践には違いがあり、それぞれが特色を持ち、様々な学派が存在するともいえる。ゆえに、華西がある特色を備えた人類学グループとして学派と称することもできなくはない。そこで、筆者は華西学派の特色を探り、おおまかな輪郭を提起して諸兄の教えを乞いたい。華西学派の特色として次の四つをあげる。

一は、學術理論において全てを取り入

れていること。前述のように華西の人類学者の学問的背景はそれぞれ異なり、それは彼らの著述に現われている。しかし彼らが初めて華西に来たのは、国難の抗日戦争期間であったため、抗戦という同じ目標のために共同で作業をする際には、常にオープンで穏やかに、枠にとらわれずお互いを尊重しあつた。すなわち学術上で諸派が共存し、全てを取り入れあうという状態が形成されていた。具体的には、華西人類学の早期のリーダー的存在であるグラハムとトールランスの学術思想は、前者はアメリカ歴史学派で、後者は文化伝播学派の傾向がある。二人の学術上の観点は異なっていたにもかかわらず、共同事業ではお互いに支持し合う仲間であつた。また、その後のリーダー的人物の李安宅は燕京大学出身で、機能主義の影響を受けていたが、純粹な機能主義ではない。近年、陳波は次のように述べている。「李安宅はボアズをはじめとするドイツ・アメリカ人類学派の影響を受けたほか、彼のズニ人類学研究には三つのルーツがある。一はカール・マン

ハイム (Karl Mannheim, 1893-1947) の知識社会学系とピアジェ (Jean Piaget, 1896-1980) の児童心理学、二はアイヴァー・リチャーズ (Ivor Armstrong Richards, 1893-1979) の意味論、三は康有為の「孔子改制考」を経て胡適や顧頡剛ら新史学に至る清代の今文経学の研究である」と。これはまさに学術思想の奥深さとすべてを取り入れていることの証明である。このほか、当時華西にいた林耀華は機能主義に属し、馮漢驥には進化論学派の影響がみられた。任乃強は長期にわたって康藏民族の社会歴史実地調査研究に従事したが、実は歴史地理学者である。胡鑑民はフランスの社会学年報派の出身で、趙衛邦は輔仁大学出身で、主にドイツ・オーストリアの文化伝播学派の影響を受けている。このように、華西学派の学者たちはそれぞれが様々な学術背景と学術思想をもっていたが、それらが華西の大いなる環境と学術気運の中で互いに衝突し、補充しあい、ともに発展して独自の理論と方法を形成した。これは中国人類学の共通の特徴でもあり、華

西のみではない。しかしすべてを取り入れるという精神は、華西において特に突出しており、その最大の特徴といえることができる。

二は、研究方法における史誌の結合である。海外の従来的人类学の研究方法は、一般に民族誌のフィールドワークに重点を置き、大量の民族誌資料の中から若干の理論を抽象化して実践を導くが、基本的に歴史資料をこの研究に連係させることはない。ただしソ連のソビエト学派は、一時期民族学を歴史学科の下位に置き、歴史を問われる問題においても民族誌の資料を用いたが、歴史資料を民族誌資料と結びつけることはあまりなかった。

華西学派の研究者は、学術背景に欧米の人類学的訓練を受けていただけでなく、中国の伝統的学術の奥深さも備えており、とりわけ歴史学の基礎がしっかりと知れている。これは背景に当時の中国における文化と歴史との関係による。中国は数千年の文明をもつ多民族の歴史大国

であり、歴史的民族誌資料を含む豊富な歴史資料を擁し、加えて当時の社会伝統において国学はまだ大きな影響力があった。そのため、華西の人類学者は西洋人類学の素養を身につけていると同時に、中国歴史学、特に中国民族歴史の素養も備えていた。このような状況が彼らの人類学研究方法に反映され、必然的に両者は密接に結びつくこととなり、目前のフィールドワーク資料にのみ重点を置く単純な研究ばかりではなかった。彼らの著作から分析すると、李安宅の代表作『藏族宗教史の实地研究』では、ラプレン寺を代表とするチベット仏教のフィールドワーク分析だけでなく、チベット文化の通時の研究も行う。まずチベット族の文化背景と歴史概況を述べ、次にチベット仏教以前の信仰と早期仏教およびゲルク派仏教の状況を説明し、最後にラプレン寺を対象とした詳細な事例研究を行う。鄭德坤の代表作『四川古代文化史』は、歴史著作ではないが、歴史文献を十分に用い、民族誌と考古学資料を結合させた新しい型の学術著作である。馮

漢驥の代表作「駕頭考」〔前蜀王建墓内石刻使楽考〕〔雲南晋寧石寨山出土文物的族属問題試探³⁴⁾〕は、みな考古学の出土文物を民族誌資料や歴史資料と結びつけて研究を進めた成果である。馬長寿の『涼山羅彝考察報告』は、これまでで最も科学的系統的で、詳細かつ正確で典型的な涼山彝族民族誌であるが、西洋の民族誌の書き方とは異なり、論文中で特に「羅彝的起源神話」「羅彝古史銘沈」「羅彝遷族」や「涼山羅彝系譜」などの四章を設ける。彼はフィールドワーク資料を用いただけでなく、多くの彝文文献と漢文文献史料を比較照合し、歴史上解決できていなかった認識問題を解決した。梁釗韜の「祭礼的象徵和伝襲——民族学的文化史研究」、任乃強的「漢藏民族文化交流的歴史痕跡³⁵⁾」、聞宥の「烏蛮統治階段的内婚及其没落」〔楊漢先との共著³⁶⁾〕も、民族誌と民族史を結合させた秀作である。このような研究方法は、華西の中國人学者に影響しただけでなく、外国人学者にも同様にみられ、グラハムの代表作「羌族之習俗與宗教」³⁷⁾では、大量の漢文

歴史資料を引用して比較研究している。

まさに華西人類学の研究者は、研究方法において前述のような努力をしたため、研究成果には常に新しさと独創的な見解がみられた。こうした動きは、歴史学会の注目と支持を受けた。当時、徐中舒（一八九八—一九九一）や蒙文通（一八九四—一九六八）らのような四川歴史学会の代表的人物からも称賛され、率先してこのような新しい研究成果や新しいフィールドの民族誌資料が活用されることで、人類学と歴史学の良好な相互作用が促進された。宋蜀華は一九四六年燕京大学社会学系を卒業後、オーストラリアのシドニー大学研究院で人類学を学び、一九四九年修士号を取得し、四川に戻って華西大学博物館に勤めた。華西人類学のこのような研究方法の影響を深く受け、生涯努力して実践しただけでなく、多くの文章でこの方法を提唱し、多くの論文を著した。「論中国民族学的縦横観」「中国的民族学研究必須與歴史学緊密結合」「論歴史人類学與西南民族文化研究——方法的探索³⁸⁾」などは、理論上か

らこれらを総括したものである。民族誌と民族史を結合させた研究方法は、歴史人類学研究と称することもでき、これが華西学者の特徴の一つである。

三は、研究領域において康蔵地区を重視したことである。華西学者は、研究領域として一貫して今日の西南地区に注目し、主な研究の重点を康蔵地区、すなわち現在の人類学会がいう「蔵彝走廊」の地に置く。ここで言う康蔵には二つの意味が含まれる。一は、カンパ・チベット族区を指す。チベット族の伝統的な地域觀念では、チベット族は三つの区域に分布する。ウー・ツァン（西蔵の前蔵と後蔵）、アムド（蔵北、川西北、青海西南と甘南牧畜地区）、カムあるいはカムパ（西蔵昌都、青海玉樹、雲南迪慶、四川甘孜と阿壩）である。カム・チベット族はチベット語のカム方言を話し、現在の四川と西蔵の間に居住するため、習俗のうえでも他の二つのチベット族とは区別されており、その地位は特殊である。二は、旧西康省とチベット自治区の二つの地域を指す。清末以来、政府は四川と西

蔵の間にカム・チベット族の居住する省を設置する計画をたて、一九三九年に正式に西康省を建省し、一九五三年に撤廃した。そのため、康蔵はある時期には西康と西蔵の二つの地域の併称であった。

西南地区のチベット族の分布はかなり広大で、地形はとても険しく、清末以来外国勢力が侵入した。さらにこの地のチベット族はチベット仏教を篤く信仰しているために、チベット文化の特徴が顕著である。同時に、西康建省後、最大の民族居住区である大涼山も西康省に入れられた。この地域のイ族も奴隸制度が盛んで、他集団と対立する民族関係も顕著であり、はっきりした特徴がある。華西人類学者が研究の重点をこの地域に置いたのは、当時の客観的な情勢の要求であるだけでなく、學術研究的な必要もあった。以上のことから、華西の人類学者は二〇世紀初めからこの地域を重視し、萌芽期の華西大学博物館、社会学系、華西边疆研究学会だけではなく、抗日戦争期の華西边疆研究所、抗日後の康蔵研究社など人類学の機関でこれを研究の重点とし

なかったものはない。『華西边疆研究学会雜誌』や『康蔵研究月刊』などの刊行物もこの方面の研究論文を大量に掲載した。さらに華西の人類学者は、李安宅、任乃強、李有義、謝国安、劉立千、蔣旨昂、于式玉らはチベット族を、林耀華、馬長寿、徐益棠、趙衛邦らはイ族を、馮漢驥はチャン族とイ族を、胡鑑民はチャン族とミャオ族を重点的に研究した。外国の学者では、グラハム、トールانسらはチャン、チベット、イ、ミャオなどの民族分野を研究した。よって、華西人類学者の主な貢献は、康蔵地区の民族にあるといえる。今日、当時の華西学者の著作をあらためて読むと、やはり我が国の人類学史上におけるその重要な地位と多大な貢献が明らかである。その研究の広汎さと奥深さは、総じていえば南北両派をあわせたともいえ、これは中国人類学華西学者のまた一つの特徴でもある。

學術は、総じて絶え間ない発展の中で進化する。中国人類学の華西学者は、一九五二年以降、中国學術界から消えてしまったが、その影響が完全になくなった

わけではない。その影響は、多かれ少なかれ、陰に陽に、現在の西南の人類学研究にみられ、貴重な文化遺産とみるべきであろう。現在、我が国の人類学はまさに重要な発展段階にあり、過去の学術史を十分に顧みて明確に過去を認識し、未来のために、前人の研究をふまえた新たな業績を創出しなければならない。近い将来、我が国の国情と実情にあった新しい中国人類学派が、新しい歴史的条件のもとで不断にうまれることを願っている。以上は個人的見解である。妥当でないところは、人類学会の皆様 に正していただきたい。

注

- 〈1〉 黄論文（一九八三年）は台湾『中研院民族研究所集刊』第五期、龍論文（一九八八年）は『中国民族歴史與文化』中央民族学院出版社に所収。
〈2〉 黄淑娉・龔佩華『文化人類学理論方法研究』広東高等教育出版社、二〇〇四年。
〈3〉 『蔡元培全集』第五卷、中華書局、一九八八年、一〇〇一—一一頁。
〈4〉 同書、四二〇—四二二頁。

- 〈5〉 同書、四二一—四二二頁。
〈6〉 李亦園『民族誌学與社会人類学——台湾人類学研究與發展若干趨勢』潘乃穆等編『中和育——潘光旦百年誕辰記念』中国人民大学出版社、一九九九年、五五二—五五三頁。
〈7〉 曾昭璇「代序…哲人已逝業績長留」『梁劍韜民族学人類学研究文集』民族出版社、一九九四年、四頁。
〈8〉 王笛『街頭文化——成都公共空間、下層民衆與地方政治（1870-1930）』中国人民大学出版社、二〇〇六年、一一一—七頁。
〈9〉 葛維漢はグラハム自身がつけた中国語名であり、中国ではこの名で通じた。李紹明・周蜀蓉選編『葛維漢民族考古学論著』四川出版集團巴蜀書社、二〇〇四年。
〈10〉 『華西医科大学校史（1910-1986）』四川教育出版社、一九九〇年、一三一—四頁。『四川大学史』第四卷『華西協合大学 1910-1949』四川大学出版社、二〇〇六年、三〇—三二頁。
〈11〉 『美』スーザン・R・ブラウン（Susan R. Brown）著、饒錦訳「[在中国的]文化人類学家——大衛・克羅克特・葛維漢」前掲注〈9〉『葛維漢民族考古学論著』二〇〇六年、二六四頁。
〈12〉 周蜀蓉「研究西部開發的珍貴文獻——『華西边疆研究学会雜誌』」『中華文化論壇』二〇〇三年第一期。『華西边疆研究学会雜誌論文目錄』『葛維漢民族考古学論著』付録2。
〈13〉 『美』ハレル「中国人類学叙事的複素與進歩」『広西民族学院学报』二〇〇二年第四期。
〈14〉 『英』トランス「羌族的歴史、習俗和宗教——中国西部の土着居民」成都美国聖經会（英文本）、一九二〇年。陳斯惠の訳本（汶川県檔案館、一九八七年）あり。
〈15〉 徐益棠『雷波小凉山之僭民』金陵大学中国文化研究所、一九四四年。
〈16〉 馬長寿「嘉絨民族社会史」『民族学研究集刊』第四期、一九四四年。同「鉢教源流」『民族学研究集刊』第三期、一九四三年。同「凉山羅彝考察報告」巴蜀書社、二〇〇六年。
〈17〉 林耀華『凉山夷家』商務印書館、一九四七年。『四土嘉絨』原稿は印刷中に散佚、「土司」および「家庭と婚姻」の二章のみ残り、論文の形式で発表した。
〈18〉 李有義「雜谷腦的漢藏貿易」『西南边疆』第一五期、一九四二年。同「雜谷腦喇嘛寺的經濟教育組織」『辺政公論』第一卷第九・一〇期、一九四二年。
〈19〉 李安宅『李安宅社会学遺著選』全五卷、四川大学出版社、一九九一年。

- 〈20〉 李安宅『藏族宗教史之实地考察』は日本の東京大学東洋文化研究所が一九八二年にその一部を出版〔訳注＝中根千枝編『Lubrang——李安宅の調査報告』東洋学文献センター叢刊別輯5、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、一九八二年。英文論文タイトルは“History of Tibetan Religion: A Study in the Field”〕。中国語版は『中国蔵学出版社』一九八九年。
- 〈21〉 『李安宅蔵学文論選』中国蔵学出版社、一九九二年。
- 〈22〉 任乃強「德格土司世譜」『民族研究文集』民族出版社、一九九〇年。後の一文は未刊稿。
- 〈23〉 蔣旨昂「黒水社区政治」『辺政公論』第二卷第一・一二合期、一九三二年、第三卷第二期、一九三三年。
- 〈24〉 『于式玉藏区考察文集』中国蔵学出版社、一九九〇年。
- 〈25〉 『四川古代文化史』は、一九四六年に華西大学博物館より出版、二〇〇四年に巴蜀書社より再版。
- 〈26〉 梁釗韜「祭祀の象徴和伝襲——民族学的文化史研究『文訊』第五卷第一期、一九四四年、同「古代醜牲祭器及祖先崇拜」『文史雜誌』第五卷第九・一〇合期、一九四五年。
- 〈27〉 顔闔「中国人鼻骨之初步研究」『測

- 定顔孔前後位置之指数』『人類学集刊』第二卷、一九四四年。
- 〈28〉 聞宥『古銅鼓考』四川大学博物館、一九五三年。巴蜀書社、二〇〇四年再版。
- 〈29〉 趙衛邦「西康合理的樊人」『華西大学中国文化研究所集刊』一九五〇年。
- 〈30〉 「羌族之信仰與習為」『辺疆研究論叢』一九四一年、「苗人的家庭與婚姻」『辺疆研究論叢』一九四五年と「羌民的經濟活動型式」『民族学研究集刊』第四期、一九四四年に分載。
- 〈31〉 『馮漢驥考古學論文集』文物出版社、一九八五年、『馮漢驥教授百年誕辰紀念文集』四川大學出版社、二〇〇一年の二冊が出版された。
- 〈32〉 『辺政公論』第四卷第四期～第一〇期、一九四五年。
- 〈33〉 陳波「祖尼小鎮的結構與象徵——紀念李安宅先生」中央民族大学人類学理論與方法研究中心通訊『探討』二〇〇七年第二期。
- 〈34〉 『馮漢驥考古學論文集』と『馮漢驥教授百年誕辰紀念文集』参照。
- 〈35〉 任乃強「漢藏民族文化交流的歷史痕跡」『新亞細亞』月刊、一九三四年卷。
- 〈36〉 聞宥・楊漢先「烏蛮統治階段的内婚及其没落」『辺政公論』第二卷第一・一二合期、一九四二年。
- 〈37〉 「羌族之習俗與宗教」前掲注〔9〕『葛

維漢民族学考古学論著』一一・一二頁。

- 〈38〉 宋先生の論文は中央民族大学民族学與社会学学院・中国少数民族研究センター編『中国民族学縱横』（民族出版社、二〇〇三年）中の「宋蜀華教授著作選編」所収。

〈39〉 李紹明「費孝通論藏彝走廊」『西蔵民族学院学報』二〇〇六年第一期。

訳注

- (1) 原題 Li An-Che, "Zuni: Some Observations and Queries," *American Anthropologist* 39(1937): 62-76.
- (2) Stephen Yang, Y. T. Beh, and W. R. Morse, "Blood Groups of the Aboriginal Ch'wan Miao of Szechwan Province, West China," *Man: A Monthly Record of Anthropological Science* 38(1938): 65-67.
- (3) 論文名正確には「釈您・俺・咱、附論們字」。
- (4) Robert Shafer, *TZIC Totemism of Sino-Tibetan* G書評。

※本論は「略論中国人類学的華西学派」として『広西民族研究』二〇〇七年第三期に掲載されたものである。

二 シンポジウムの目的

人類学華西学派の研究

李 錦

一九五〇年代以前、中国人類学史には「南派」と「北派」の二つの学派があった。南派は、一九三〇年代、南京の中央研究院民族学組と南方の幾つかの大学の人類学者を中心に、主にアメリカの歴史学派の影響を受け、少数民族を対象としたフィールドワークを重視し、伝統文化や習俗を記録し、民間文学や神話、伝説故事等を収集した。理論や解釈よりも材料が示す事実を重要とした。これに対して北派は、燕京大学社会学系を基盤に呉文藻をトップとする人類学者や社会学者を中心に、機能主義理論に基づくコミュニティ研究法によって文化の機能や制度の構造を分析し（黄淑娉・龔佩華、二〇〇四年。李紹明基調論説注（2）（参照）、理論を重視して応用し、人類学における中国化された学術思想を提唱した。

一方で、中国人類学史上には、一九三〇～四〇年代に成都の華西壩に集結した人類学者による康蔵研究を中心とした学術成果があり、それは広さと深さにおいて当時の南派と北派にほぼ匹敵した。二〇〇七年、李紹明は、中国人類学史には知られていないもう一つの学派、すなわち華西学派があるとし、その研究は中国人類学の中国化の過程を明らかにするとした。

一般に、「華西学派」という名称は、一九一〇年成都に創設にされた華西協合大学（略称、華西大学）に由来する。華西大学は、創設後ほどなくして人類学と社会学の教学と研究を行い、人類学を主要な内容とした博物部（館）をつくり、一九二二年には人類学を重点とした華西边疆研究学会を成立させ、『華西边疆研

究学会雑誌』を刊行し、一九四二年華西边疆研究所という専門の研究機構を設立した。同時に社会学系や博物館も人類学の人材を育て、四川大学の人類学者も共同して教学と調査研究を行った。加えて抗日時期には、燕京、齐鲁、金陵、金陵女子文理など六つの大学が成都の華西壩に移ってきて、華西大学と共に教学と研究にあたった。多くの著名な人類学者が華西に来て、共同で康蔵研究を進め、多くの成果を得た。

「華西学派」は、一九二〇年代前期の創設期は外国籍学者が主で、代表的人物はグラハム（葛維漢）やエドガー（葉長青）、モールス（莫爾斯）、トールンス（陶然士）である。一九二〇年代後期から抗戦前までは中国人学者が中心で、華西大学の代表的学者は、華西边疆研究所で社会と文化人類学の研究に従事した李安宅や任乃強、謝国安、劉立千、于式玉、玉文華、華西大学社会学系で人類学を研究した馮漢驥、羅榮宗、蔣旨昂、華西大学博物館で考古学を研究したグラハム、馮漢驥、鄭德坤、梁鈞鉅、宋蜀華、

華西医学院で形質人類学を研究した楊振華、顔閻、中国文化研究所で言語学を研究した聞宥、呂淑湘、韓儒林、劉朝陽、趙衛邦、董作賓、劉咸、李方佳等。代表作は『藏族宗教史之实地研究』『西康図経』『四川古代文化史』『四川人的血型研究』『論民族語言系属』『沙佛、漢藏語元音』等である。華西大学とともに成都にあった四川大学では、代表的な研究者は胡鑑民と馮漢驥で、代表作は『羌民乃信仰與習俗』『由中国親属名詞上所見之中国古代婚姻制』等で、ともに學術拠点を形成した。抗戦期は、華西学派が成熟した時期で、特に、華西壩に移ってきた人類学の著名な学者たちが徐益棠、柯象峰、馬長寿、李有義（短期）、陳永齡等で、代表作には『雷波小凉山之保民』『嘉絨民族社会史』『鉢教源流』『凉山羅彝考察報告』『凉山彝家』『四土嘉絨』『雅谷腦の漢藏貿易』等があり、どれも当時のフィールドワーク研究の優れた成果である。

華西学派には代表的な研究者と付随する定期刊行物、代表的著作、學術上の理

論や研究方法、研究地域があり、一派を形成している。同時に、華西学派の形成と発展は、当時の中国社会の需要と密接に関連している。前期は国家の近代化構築を完成させ、後期は中国の辺疆地区の危機を解決し、研究者もみな愛国心を抱いて學術を実用化し国家の目標のために働いた。華西学派はまた、新中国の成立と建設にも極めて重要な貢献をした。李安宅教授はチベットの平和的解放政策のために任乃強教授とともにチベットに従軍して資料を提供し、林耀華、梁釗韜、宋蜀華らは新中国の社会学、人類学、民俗学の開拓者の一人となった。

華西学派の研究は、本質的には中国人類学の一つの學術共同体が一九二〇〜四〇年代の特定の時期に行つた知識の構築の過程と結果の研究である。よつて本課題の鍵となる仕事はこの學術共同体の知識の構築の過程と結果にはどのような特徴があるのか、それらの特徴はこの學術共同体をどのように一つの学派となし、人類学の中国化の進展に参与し影響をあたえたのかを研究することである。

現段階での国内外の研究成果によれば、人類学上の意義において、華西学派の學術体系には主に以下の三つの特徴がある。これらの特徴を明確に分析、総括、系統化すれば、人類学における華西学派をおおよそ定義できるだろう。

第一は、完全な人類学の学科体系が備わっていること。形質人類学や文化人類学（民族学）、考古学、言語学の四大部門を含み、どの部門にも十分な科学研究の力と教學のための資源がある。第二は、他学派と区別する特色的理論体系があること。これは三つの内容をもつ。一は、研究対象が康蔵を中心とした族群（エスニック・グループ）と地域研究であり、それによつて機能主義コミュニティとは異なる文化と文明の理論を生んだ。二は、中国伝統の歴史学研究を重視し、あわせて博物学や地理学、その他の自然科学の知識の基礎が備わっていたことから、制度や文化、社会構造に関する縦横にわたる深い動態変化理論を生み出した。三は、辺疆建設と国家統一を応用して、辺疆安定と国家建設の相關理論を

提起した。

第三は、明確な体系をもち、社会構造と制度の静態的認知を重視するだけでなく、文化の相互的影響と変化の動態的認知も強調する。父子連名の系譜や、血統階級、武力闘争などの族群と地域の文化的事実を概括する概念に貢献しただけではなく、「辺疆宗教工作はすべての工作の根幹である」等の応用人類学の言葉を提供した。しかも南北学派と比較する

と、辺疆と民族地区に対する研究は、それを国家化の多元統一の道に取り入れようとするものではあるが、文化への態度と国家化への過程の選択は同じではなく、華西学派が強調するのは、文化の平等な交流、往来、融合であり、漢文化中心主義にたつ管理や改造ではない。そのため辺疆、民族、国家、社会、文化、歴史について提示した見方はみな、独自の問題意識と思考構造をもっている。

二〇世紀前半の華西辺疆研究と華西学派——松岡正子

本シンポジウムの目的は、なぜ今、「二〇世紀前半の華西辺疆研究と華西学派」を取りあげるのか、その今日的意義はどこにあるのかについて考えることにある。なぜなら、当時の華西研究は、中国において最初の系統的な少数民族研究であるなど中国人類学史において極めて重要でありながら、これまでほとんど取りあげられることがなかったからである。

二〇世紀前半の華西研究は、李安宅や

グラハム（葛維漢）、胡鑑民などの個々の研究者の研究成果がチベット族研究やチヤン族研究等で引用されることはあっても、その研究拠点であった華西協合大学（一九一〇～一九五二）の華西辺疆研究学会（一九二二～一九四六）や四川大学の人類学・社会学、その成果を掲載した英文学会誌『華西辺疆研究学会雑誌』についてはほとんど知られることがなかった。その意味で、二〇一四年、四川

大学博物館の整理によつて『華西辺疆研究学会雑誌（整理影印全本）』（全十冊、中華書局）が出版されたことは、大きな意義をもつ。

また当時の華西研究は、近代中国の最も重要な時期と深く関わっている。清末民国期、華西は政治的にも非常に重要な地域となっていた。中国進出を謀る欧米列強は、チベットを含む辺疆の華西に注目し、様々な方法で情報を収集した。列強は情報収集のための常套手段として宗教や教育活動を利用した。一九一〇年、アメリカやイギリス、カナダ等五カ国のキリスト教会は成都に華西協合大学を創設し、教育や学術研究だけではなく、宗教、医療など諸活動の拠点とした。華西協合大学は現地の情報収集と研究を目的として人類学や社会学を重視し、華西大学博物館（一九一四年）や華西辺疆研究学会を設けて学術研究を進めた。その成果は英文の学会誌『華西辺疆研究学会雑誌』（二六卷二〇冊、三〇〇篇余り、一九二二～一九四六年）に発表され、世界に向けて発信された。また中華基督教会

全国総会も一九三九年に辺疆服務部を設立して、伝道のかたわら各地の少数民族を調査し、その貴重な記録が『辺疆服務』に収められている。

さらに一九三一年以降は、日本によって東北部や沿海部が次々と占領されたために、国民党政府は首都を内遷し、華西は全国民の抗戦の大後方となって、華西辺疆の開発と管理、すなわち辺政学が重要となった。また、一九三七年の「七七事変」以降には、燕京、齐鲁、金陵など東部の六大学が成都に疎開し、多数の著名な人類学者が華西大学や四川大学等とともに教学し、華西辺疆研究学会に参加して康蔵地区でチベット族やチャン族、イ族、ミャオ族等のフィールドワークを行った。その成果は『華西辺疆研究学会雑誌』に報告され、外地からの研究者が去った一九四六年以後も『西南辺疆』『康蔵研究月刊』『中国辺疆』『工商導報』『辺疆研究通信』などが刊行された。

李紹明は、論文「略論中国人類学的華西学派」（二〇〇七年）で、中国人類学には知られていない「もう一つの学派」

があるとして、この一九一一～五二年の四〇年間の華西研究の研究者集団を「華西学派」と呼んだ。華西学派問題は、李紹明のこの提起に始まり、李錦らの国家プロジェクト「一九二〇～四〇年代の人類学華西学派の学術体系研究」に引き継がれ、これからようやく討論が深められようとしている。ただし、両者は華西学派の期間が異なる。李錦はこれを一九二〇～四〇年代とするのに対して、李紹明は「第一…一九一一～一九三七 萌芽期、第二…一九三八～一九四五 形成期、第三…一九四六～一九五二 継続発展期」とし、萌芽期を外国籍研究者によって人材が育成された一九一〇年代からとする。これは、単なる期間の長短の問題ではなく、華西辺疆研究学会成立以前の宣教師を主体とした初期の研究や華西辺疆研究学会の外国人研究者が華西学派に及ぼした影響や、一九五二年の院系調整を華西研究という視点からどのように評価するかという問題であり、今後の課題の一つである。

ところで、民国期の華西研究は、主な

対象地域を康蔵地区としたが、これは現在、中国西南民族研究学会の「蔵彝走廊研究」に引き継がれており、一九八〇年代から近年までの成果は「蔵彝走廊研究叢書」（二〇〇七～二〇一四年）として刊行され、代表的な論文が『中国西南民族研究学会建会三十周年精選學術文庫 四川卷』（二〇一四年）に収められている。筆者は、当時の華西研究についても、蔵彝走廊研究のような地域研究が有効であると考えている。なぜなら当時の華西辺疆研究は、人類学華西学派という範疇を超えたものであり、華西大学初期の外国籍研究者や教会活動に伴う様々な成果も考慮しなければならいからである。

そこで、本シンポジウムでは、清末から民国期および一九五二年院系調整以前までの、二〇世紀前半における華西学派を中心に行われた華西辺疆研究について、地域研究の視点から様々な指摘を期待したい。

三 華西边疆研究と華西学派研究の意義

華西学派における研究対象と地域、時代

冉光榮

華西学派研究について三つの提言を行う。

第一は、具体的な研究についてである。

(1) 華西学派の研究対象と地域を正確に把握すること。華西学派は主に康蔵の研究であり、康蔵の主な地域は岷江上流域である。中国の三大民族走廊において、最も歴史的内容を含むのは六江流域

であり、なかでも豊かな文化的内容をもつのが岷江流域で、そこは康蔵文化の発祥の地である。また、岷江流域は、中原地区の二大伝統文明（黄河文明と長江文明）が仲介され交流した江源文明の地である。江源文明の存在は、すでに考古資料によって証明され、中国学术界や政界でも認知されている。長江の源を、麗道元は岷江上流とし、清朝は毎年、江源文明の地で祭祀を行い、光緒帝は九篇の祭

文を書いた。中国文化の本質は江源文明の水文化であり、その最高神である江神は岷江上流にいる。江源文明を黄河文明と長江文明とならぶもう一つの中華文明だという者もあり、二大文明の間にあって四川の古蜀文化をうみ、それは南北両文明の様々な特徴をあわせもつ。

(2) 康蔵地区は、民族走廊地区のなかで最も豊かな歴史をもつ。西北民族が西南に移動し、西南民族が西北に移動する時に必ず通過する地である。歴史文献によれば、黄帝の時に岷江上流の古蜀文化と直接の交流があった。例えば通婚については、古代の通婚は文化交流の最高の表現であるが、それは同様の文化層のもとはじめて可能である。よって黄帝の二人の息子はともに岷江上流にいた。華西学派の学者たちが岷江流域に入って調

査を行ったのは、調査条件が良好というだけではない。当時の松懋茂道は清代に国内の民族地区の中で最も設備が整っており、茶馬古道やシルクロードがすでに存在し、朝廷の介入もあったため、交通が比較的便利であった。また、学者たちが岷江上流域の文化をよく把握していたことも理由の一つである。

師である徐中舒先生は一九五九年にチャン族を調査し、四川民族調査組に二回情報を送った。彼は基本的に政治運動には参加しなかったが、岷江上流のチャン族を研究した折、二本の手紙を書いて自己の意見を述べた。一九八〇年代初めに、李紹明や周錫銀とチャン族史を執筆した時、母校に彼を訪ねた。彼はチャン族史の編纂を称賛して、一に、岷江上流の羌と古羌は一体であること、二に、特に馮漢驥と胡鑑民の岷江上流調査にふれて、この地域には研究の価値があると話された。岷江上流の調査について、当時の学者たちはこの地域のことを明確に認識していた。それはこの地域が豊富な歴史をもっているため、成果を挙げるこ

が可能であることを意味していた。涼山彝族自治州の研究と比べると、かなりの差があることを再度強調したい。また南北文化の相互の理解と影響にも注目すべきである。まさにそれぞれの地方文化の多様な特色が輝く中華文明を構成するからである。これが特殊研究の後に得られる一般の規律である。

第二は、歴史の責任感についての問題である。

華西学派は、歴史の特別な時期に生まれており、学者としての使命感は非常に明確であった。早期の一九二八年に岷江上流で調査した黎光明を特に取りあげた。彼は中央大学学生で、助理研究員であり、傅斯年が派遣して調査させた。傅斯年はとても厳格な学者で、黎光明の調査報告書は些か粗雑であったようで、ついに出版されることはなかった。黎光明と王元輝がチャン族地区に調査に行った時は、「奮治辺区」を公開表示しなくてはならなかった。二人は後に岷江上流地区で働き、県長や専員になった。このうち黎は、後に懋功県県長になってアヘン

禁止政策を実施し、見せしめによって局面を制圧しようとした。そこで、当時懋功県で最大の土豪であった杜鉄樵を捕えたが、逆に息子の襲撃をうけて捕えられ、殺された。彼の死の方には二説ある。一つは、綿布団にくるまれ、石油をかけられて焼死した。いま一つは、それよりはるかに悲惨で、生竹で体を折り曲げられて縄で縛られ、直腸を肛門から引き出されて縄と結ばれ、外された竹の反動で内臓を引っ張り出されて死んだ。死後、国民政府は全国にむけて彼を褒めたえた。

莊学本は非常に明確に西北を重視するよう提起した。東北を失ったからには、必ず西北に関心をもたなければならぬ。「西北の建設」、これは多くの青年の行動目標であると。莊学本が具体的に生蛮の地区に行かなければならないといったことで、馮漢驥、胡鑑民、聞宥らを含む人々はこれらの地域に調査に行くことができ、研究者として新たな一歩を踏み出したとされた。中国人類学の誕生は、まさにこのような特殊な、民族存亡の時

期であった。これらの学者は自らの苦勞や鮮血によって研究の扉と方向を切り開いた。ここで彼らを讃えて宣言したい。我々は、彼らの学術上の生命力を踏まえ進まなければならないと。

第三は、これらの学者の学術成果が新しい時代を切り開いたことである。

胡鑑民のような調査はチャン族研究の頂点にあるといえる。数年後、私が現地調査に行つて同じことを聞いた時、幹部すらもそれについてはわからず、すでにほとんど消滅していた。彼の調査資料はとても得難い。もし胡と女性たちの間に真の信頼関係がなければ、中年女性が自分と夫との性生活の実情をはなすはずがない。大量の風俗資料の獲得はこのような信頼の上になり立った。彼は人と自然の生産力は相互に影響しあうと説明する。これらの風俗調査はチャン族研究に対する大きな貢献である。

馮漢驥の象徴考古学研究は四川における現代的考古学の始まりである。現代的考古学への第一歩は、馮が主導した王建墓の発見に象徴される。一九三八年、彼

は岷江流域で調査した。一般に、考古学の発掘報告は『文物』に載ればそれなりの評価を得たといえるが、彼が書いた学術簡報はさらに上級の『考古学報』に載った。彼は民族誌の編集のスタイルを切り開いたといえる。

莊学本は写真家で、写真集を出版した。資料は非常に豊富で、写真の影響は撮影対象をはるかに超えた。彼の写真は彼の辺疆の人々への尊重を反映しているが、この点は長い間無視されてきた。莊は、当時のチベット族とチャン族の精神的な表情を表出した。そのため彼の作品は後世に伝えられ、不朽である。チベット族作家の阿来は評している。チベット

族が自己を描写する時、莊のような漢族学者の描写は価値があるだけではなく、貴重な模範であり、学問理論への示唆を与える、と。

これらの学者の学術的影響力はその学科を超えて、四川における新たな学科群の構築やチャン族地区の社会発展を推進した。抗日戦争の時には、岷江上流域のチベット族やチャン族地区では強烈な愛国心と広汎な献金、民衆動員が示され、国民政府や学者が注目した。彼らの特殊性を分析することは、国民への教育だけではなく、国家にとっても重要な価値をもっている。

西南研究と華西学派

石 碩

王建民の『中国民族学史』上・下（雲南教育出版社、一九九七・九八年）は、西南中国についての調査と資料が不十分である。現在、西南中国研究に関して、中国民族史には重大な欠陥があり、あた

かも片足が不自由であるかのようにアンバランスである。民国期全体において、西南は中国の近代人類学民族学の発祥の地といえる。林耀華の甘孜での調査がそうであるように、西南の地から民族研究

を始めた者は少なくなく、西南は多くの研究者を生み出した。特に、抗戦期にはそうであった。その意味で、二〇世紀前半の西南について系統的な総括および整理研究を行うことは極めて重要で、その学術的意義は大きい。もしそれがなければ、二〇世紀前半の中国民俗学や人類学がどのように発展したのかを理解することは難しい。また当時の人類学は形質人類学から始まったといえ、王明珂（台湾中央研究院）が、当時西南で実施された中央研究院に保存されていた体質測定資料を私にコピーしてくれたが、写真はどの民族についても残されており、その量は少なくない。

当時の研究は、抗戦と密接に関わっている。大量の大学が内陸部の西南に移ってきて、西南研究に従事した。過日、私は雲南で歴史学会議に参加して、中国の歴史上の民族問題について討論したが、そのなかで馬敏（華東師範大学）は華東師範大学も抗戦期に大理に移って、現地の民族に関する多くの研究を行ったと報告した。彼に、この課題に関する共同研

究を提案したところ、彼も、それは未来に向けた重大な學術研究の方向であるといつて同意した。

二〇世紀前半には、二つの重要な点がある。一は、研究が個人によるものから団体や機関に転換したこと。例えば、雑誌の創刊は二〇世紀以前にはなかった。二は、現代的な学科の萌芽と發展の重要な時期であること。当時、学科間の境界は曖昧であつたのが、次第に明確化されていった。

本テーマに関して以下を提起する。

(1) 華西学派の代表的な研究成果を集めて出版すること。現在の西南民族研究は民国時期の成果を十分に継承していない。私には、中央民族大学修士課程修了後に四川大学の博士課程に入学した学生がいる。彼は口頭試問終了後、どんな本を学べばよいか聞いてきたので、任乃強や李安宅等は読んだことがあるかと聞くと、民国期の書は読んだことがないが西南研究をしたいと答えた。中央民族大学のような民族学研究者を専門に養成する大学でも先人の成果を継承することがあ

まりないのだと感じた。この意味で、李錦がこのプログラムで華西学派の代表的な成果を出版できることは、重要な學術的貢獻である。

(2) 西南は現代學術史において重要な發祥の地である。現代學術が含む民族学や人類学、言語学、歴史学、社会学等の發祥は、西南研究と密に関係する。學術史や団体、人物およびその研究方向から知識背景と関連させて學術史全体を整理することによって、二〇世紀に中国の多くの近代的学科がどのように發生して發展したのかを正しく読み取ることができ。もし整理が完成すれば、王建民『中国民族学史』を超えるものを書くことができるだろう。

(3) 二〇世紀前半の中国边疆や民族および地域研究における華西学派の地域や學術的影響を把握すること。これによって初めて、華西学派の學術的貢獻や二〇世紀前半に果たした役割や地位、作用に関する全面的な知識が得られる。

(4) 顧頡剛は一九三九年『中華民族是一個』を書き、関連の問題について討議

したすべての論文をこれに集めた。當時は「中国本部」と「边疆」という二つの概念があつたが、边疆の概念は非常に広かつた。顧頡剛は成都を華西と称することとに反対し、華西とはチベットの西部を指すとした。同様に、華北が華北平原を指すことにも反対し、華北はモンゴルを含むべきとした。これは抗戦期前後に边疆や本部の語の範圍がまさに変化しており、边疆民族地区の認識が中国全土からみた「中国本部」に対する边疆という意味をもっていたことを示している。

二〇一九年四月二一、二二日には煙台で新時代中国边疆學術セミナーが開催され、主に中国边疆の概念について討論する予定である。実は、中国本部という概念は、抗戦期にすでに少しずつ変化しており、それは西南边疆の研究と密に関わっている。費孝通や林耀華、馬長寿、楊成志など多くの研究者が海外留学から帰国し、集中して西南边疆に行つて社会学や人類学、言語学、歴史学等の研究をした。そのためこの地域は、二〇世紀前半の中国边疆や民族、地域研究の發展を

理解するために非常に重要である。例えば、李安宅らは国外で人類学を学び、新疆のある地域にはいつて研究を続け、その地域の最初の研究者となった。李安宅夫婦はラプラン寺に長期滞在して『拉卜楞寺』を執筆した。華西学派の学者は多くが留学帰りであったが、何人かの本土で学んだ学者もいて、両者は関わりを

边疆服務と華西学派

楊天宏

まず、華西の边疆服務について述べる。私は、十年前に『救贖與自救——中華基督教會边疆服務研究』を出版した。

边疆服務（中華基督教會全國總會が布教と边疆民族の調査のために一九三九年から西南民族地区で展開した活動）は重要な領域である。抗戦からほどなくして、大後方は、辺縁の地域であったのが経済の重点地区となり、川康地区の後方建設も極めて重要となった。また、民国の東南沿海および中部にある多くの重要な大学と教育機関、教会組織もみな西南に

もつていた。華西学派をきちんと整理することで、二〇世紀前半の西南研究において人類学や民族学、歴史学、言語学、社会学がどのように交流して関係が生まれたのかを基本的に理解することができると。このことの意義は、すでに華西学派研究の枠を越えるものである。

移った。

中華基督教會は、教派を超え、中国化された中国教会である。この組織の明らかな特徴は、中国化の過程における教会活動にみられる。边疆地区で展開された活動には二方面からの影響がある。一は、边疆服務に宗教的な「救贖」の意味が含まれていること。背景には、少数民族地区の辺民は生活が極めて苦しく、イエスの恩恵を受けていないため救済しなくてはならないことがある。二は、キリスト教が中国に伝えられた後、民族地区

では激しい衝突がおき、一九二二—一九二七年まで反キリスト教運動が続いて、一九四九年以後は国外からきた教会は共產党によって追放され、国内の教会はそのまにされたこと。

そのため教会が中国で布教するのは、一方で他者を救済し、もう一方で自己を救うことであり、边疆服務全体にこれが貫かれた。キリスト教の発展と変革についていえば、一九世紀末以前、キリスト教は原理主義を遵守し、主にイエスの福音を伝道し、教徒を勧誘して帰依させた。一九世紀末以降、西洋の教会は原理主義から社会福音へと重要な転換を行った。中華基督教會は原理主義を信奉するのでもなく、边疆服務の過程で教徒を勧誘して帰依させることを第一の目的とするのでもない。服務と現地社会の改造、および現地住民にもたらされる実質的な利点を通してイエスの真の福音を享受させることにある。この運動は一九三九年から一九四九年以後まで展開された。边疆服務は、「抗美援朝」期（朝鮮戦争期）に反アメリカ帝国主義を理由に停止さ

れ、一九五五年には参加した外国人がみな中国を離れ、終結した。

辺疆服務と華西学派の關係については、辺疆服務の重要な内容に触れなくてはならない。辺疆服務部（略称、辺部）は成立後、辺疆服務計画をたてて、辺区での辺疆研究を活動の重要な内容とした。辺区とは主にチベット、チャン、イ族が集居する地域であり、辺区で有効に服務するには辺疆研究を理解しなければならなかった。辺疆研究で最も重要な内容とは、宗教、習俗、言語等であり、広義には、さらに教育や計画生育、医療衛生状況等を含む。

当時、華西壩（成都華西区）には五つのミッション系大学が集まっていた。うち華西協合大学は辺疆研究所を設立し、辺疆研究に従事する研究者を集めた。五つのミッション系大学は多くの活動を集団的共同に行い、特に社会学や人類学がそうであった。辺部は華西壩の五つのミッション系大学と協力して多方面の研究を行ったが、主に人類学や民族学の研究と調査において人員や資源で協力

した。

辺疆研究は清朝末に一度盛んになり、民国期に衰退したが、一九三〇年代に日本が侵入して民族存亡の危機が増大すると、大量の学者が再び辺疆を研究し、辺疆研究学科の地位は回復した。しかしこの時期の辺疆研究には変化がみられる。清朝末は伝統的方法によったが、民国以降は理論と方法において複数の学科の理論や方法を取り入れ、とりわけ人類学や民族学、宗教学、社会学のそれを用いた。もう一つの変化は、個人による研究から集団研究へと発展したことである。

胡適の父胡伝は東北（実は黒龍江以北）を研究した時、主に中ソ国境付近を研究し、一人で現地に入ってフィールドワークをした。このような方法は、學術機構が多くの労力を動員して共同調査するのとは異なる。しかし民国以降は研究方法が変化した。特に、抗戦のために学校が内地部に移り、多くの研究者がそこで人類学や民族学、社会学の理論の基礎知識や関連研究の歴史を教えるようになり、研究方法も個人的研究から集団的共同研

究へ変化した。

李安宅は、辺部の研究に参加した華西学派の一人である。ただし、彼は辺部の構成員という身分で参与したのではなく、辺部側が彼を招いてその資源を利用した。そのため、彼の研究と辺部の活動は重なっている。グラハムは、チャン族研究において、特に宗教の「端公」研究では、チャン族地区に入って多くの端公と知り合い、その作法を詳細に観察して記録した。そこで得られたものは、辺部が辺疆服務を行う際に非常に有用であった。グラハムの「羌民之習俗與宗教」は、辺部と華西壩五大学の人類学・社会学者による共同の宗教研究という背景のもとに完成したものである。

辺部の研究は、大学が派遣した研究に比べて内容が深い。多くの学者が辺地に行つて研究したが、数日の滞在によるおざっぱな考察であり、真の研究とはいえない。辺部の研究は、辺疆服務に力を尽くすことを目的としているため、一九三九〜一九五六年の一七年間ずっと現地滞滞して住民と深く接触し、衣食住を

ともにしており、このような研究は非常に深く具体的である。彼らの研究は、大学機関のそれに比べて学問的理論に欠け、人類学や社会学の方法とは一致しないが、その観察記録は大学機関の学者のものよりさらに詳細で具体的であり、一般の観察では見ることのできないものが含まれている。学者たちと辺部の共同研究は互いに影響しあつて、一九三〇年代以降の辺疆地区の民族、宗教、社会体制など各方面の研究を進めた。華西学派の形成に大量の大学機関の学者の努力があつたというのであれば、共同研究を行つた辺部側の努力も無視することはできない。

しかし、問題が一つある。グラハムは外国人であるが、彼を華西学派の一人とみなせるだろうか。これは学派に対する認識の問題である。我々が中国人人類学の華西学派を語る際には中国人を指すが、もしそうであれば、華西辺疆研究学会は多くが外国人であり、彼らは『華西辺疆研究学会雑誌』に多くの文章を発表し、その数量は中国人より多い。なぜならこ

れは英文学会誌であり、主に国外に向けて発信されたからである。しかしグラハムのような、中国に来て華西に長期滞在し、大学で研究に従事した外国人を華西学派の学者とみなしてもよいだろうか。

私は不可能だと思う。なぜなら中国の華西学派について整理することは外国人を排除することである。華西大学は当時イギリスやアメリカのキリスト教会が中国に創立したミッション系大学であるため、中国化という名義のもとでは、それは人類学とはいえないからである。かつて私は、徐新建の招きで中文系学生に人類学について次のように話した。現在は何にでも人類学という肩書をつけ、中国化と称するが、中国化とは人類学と同じ学科規範を述べることでない。このようにひとまとめに「化」として拡大すれば、人類学とはいえなくなってしまう。もしこれらの外国人学者による中国での人類学研究を中国華西学派と称すれば、彼ら自身の自己認識と皆さんの判断との間には矛盾や衝突が起きるはずであり、考慮すべき点である、と。

『華西辺疆研究学会雑誌』には多くの具体的な研究課題があるが、李錦の「華西学派の学術体系研究」は課題を論証するにあつて具体的な問題が欠如している。我々は、これらの研究領域において学者はどのように思考し、研究成果を出さなくてはならないのかに注意すべきである。これは一つの学科史の再建において実質的な意義をもっており、空虚なことを多く語る必要はない。例えば、具体的な一つの歴史問題を研究する場合、私は学科の理論や方法、原則を具体的に述べるが、私自身から近代中国の学科体系の統一的理解を知ることが不可能である。同様に、当時の学者自身から学科の体系を探るのは難しい。学科体系を語りすぎれば、中国化の論議が欠けてしまう。中国化と、学科の共通の価値の追求や研究方法とをどのように調整するかは考慮すべき問題である。

辺部が行つた辺疆研究のある部分は、華西辺疆研究と重なっているが、それだけの目的は異なる。辺部は教会が設立した機関であり、教会の基本的な目的は布

教伝道で、辺疆研究は伝道のためであり、他民族の信仰はみな遅れた潜在意識にすぎないので至高のキリスト教を伝教して辺民の信仰を変えなければならなるとする。このような目的のもとで研究すれば、研究対象者の信仰宗教についての判断は客観的ではなく、この点には注意すべきである。辺疆服務はキリスト教がおこした社会福音活動であり、辺疆研究はその過程で進められた。辺部と華西研究は互いに連動しあい、辺部は現地を根拠地を開拓して伝道と布教の拠点を持ち、現地の少数民族と接触して研究員に利便を提供するが、最大の限界はその研究がキリスト教伝道の目的のもので行われたことにある。彼らは、少数の者は民族学や人類学の訓練をうけ、あるいは自分で訓練したが、大部分は専門の学術的背景をもたない。友人の助けをえて檔案館で辺疆服務の檔案を見たが、五、六冊のファイルの中には英文の、数十あるいは百通以上の手紙や報告が収められていた。これらからわかったことは、辺部が行った研究領域は広いが浅い、専門家が

行ったものではなく、多くが調査記録的性質のもので研究色はない、しかしこれらの資料は真の研究の補助的役割をもつことである。

辺部と華西学派の両者は同時期に、同様の活動地域で活動した。ただし華西学派の民族学・社会学者が甘孜や阿壩地区に偏って西康に対して比較的薄いのに対して、辺部は西康を重視した。イ族は、近現代においてはチベット族ほど突出しておらず、対外的な国際政治に敏感ではなかったが、国内政治には敏感であった。イ族は宗教問題で内地と矛盾や衝突を起こしたりはしなかったが、非常に凶暴でアヘンと銃を多く持ち、三〇万丁を

超える銃を所有するともいわれ、アヘンによる収入はすべて銃と銃弾にあてられた。一九三〇、四〇年代のイ族問題は非常に深刻で、中国における第二の問題であった。華西学派は重視しなかったが、

辺部は西康地区を辺疆服務と辺疆研究の重要地域と位置づけたために、辺政研究へ示唆するところは大きい。チベット問題は領土の安全に関わるのに対して、イ族問題は内政に関わり、地域の安定にとつて重大な意味があった。二十数年前の私の印象では、成昆鉄道沿線では涼山地区を通過する時にはいつも列車が遮られて強奪にあったからである。

中国辺疆学構築に対する華西学派の示唆

——羅中枢

一九二〇、五〇年代、華西壩（華西）に一群の学者が終結し、特に、西南辺疆地区を研究した。研究の重点は西南各民族の生活環境や生業形態、社会集団、社会文化等、特に彼らの習俗や宗教、儀

礼、年中行事、通過儀礼、方言、道德、文字、服飾等の文化現象である。学派として一派をなす基準としては伝承性、地域性、問題性があるが、華西学派には後者の二つがあてはまり、特に地域性に特

徴をもつ学術共同体であり、李紹明もこれを取りあげた。

私が興味をもつのは、一つの学派はどのように形成されるのか、である。学派が学派たるには学問上の哲学、学説、学術伝統、影響力（刊行物、各種活動等）等の条件が必要である。華西に集結した学者の研究や学術背景は広く、歴史や考古、言語、民俗学、社会学、宗教学、地理学、生物学などに及ぶが、このように多くの学科の研究はどのように一つの学派を形成することができるのか。これを一つの学派と呼ぶには、より深層の要因が必要である。これらの学者は、西南辺疆という特殊な地域で研究していくなかで、様々な学科や各学科の基層にある「構造規則」や「符号規則」を超越した。それはあたかもフーコー（Michel Foucault, 1926-1984）が認識するところの、様々な学科の理論知識が内包する構成や組成型式、表現法則、意識性の知識の下には実証的無意識があり、このような実証的無意識は各学科の知識の潜在条件を決定するだけでなく、各学科の基層

と繋がって縦横に往来し、共通の言葉や文法構造を発見する。すなわちフーコーのいう「知識の無意識」あるいは「文化の基本コード」である。フーコーの理論は、華西学派の理解にも用いることができる。「特定のある時期に、経験の中の一つの知識領域を画定し、この領域の認知対象の存在方式を規定し、人々の常識に理論の力をあたえ、人々がそれらを真の事物と認知するかを決定する」ことである。

華西学派の研究について、その今日的意義と、中国辺疆学構築への示唆という視点から述べる。

(1) 華西学派研究の今日的意義については次の三点をあげる。

一は、西南辺疆に対する認識を深めたこと。華西学者は華西、特に西南辺疆に集結して、様々な学科による辺疆研究を行った。辺疆とは、一般に、文化的には見知らぬ、心理的にはるか彼方の遅れた野蛮な、未教化の場所である。そのため辺疆地区やそこに居住する民族に関心をもつ者は少なく、特に、辺疆の生きた

集団や個人、その思考や行為に注目する者は少ない。華西学者の研究はこれらの空白を大幅に補填するものであり、それは中国のみならず、世界的な意義をもつ。その研究の得難い点は、彼らがみな実際に現地に行つて、人を調査対象の中心におき、各テーマに基づいてミクロな視点から専門的に学術化したことである。現代辺疆人類学からいえば、彼らは西南辺疆の人や民族およびその日常生活の実践、形式化された各種の活動や資源に注目し、西南辺疆がどのように形成されたかを上から下への視線で観察した、すなわち辺疆およびその形成過程に注目し、様々な歴史段階や空間、民族文化のもとで多様な辺疆の形態が生まれた条件や発生、発展、消滅の過程を探った。これらが研究されなければ、辺疆が一つの動態の過程であり、時間や空間のもとで人の実践や活動、生活が連携していることを理解することはできない。様々な生活が辺疆に存在して、境界を越える行動性や能動性があったこと、辺疆はどのように、なぜ、いつ形成され、維持され、

消滅するのかを追求すること、これが我々にとつての今日的意義である。

二は、中華民族の未来を豊かにしたと。現在、中華民族を「多元一体」と称するが、「多元」とは各民族をいう。多くの専門家が少数民族を研究した。例えば李安宅や任乃強らはチベット族、林耀華や馬長寿らは彝族、馮漢驥らはチャン族や彝族、胡鑑民らはチャン族やミャオ族を研究したが、李紹明は華西人類学者の主な貢献は康藏区内のこれらの民族研究にあるとする。学術的にみて、彼らの研究は民衆の視点で辺疆や社会、国家の介入に条件を提供しただけでなく、多元的な視点で少数民族を一体化して発展させ、中華民族に凝縮するための基礎を定め、少なくとも今日、これを基礎に多元一体の中華民族を研究するための良好な学術成果であるといえる。

三は、中国に関する総体的な知識を完成させたこと。過去の歴史は辺縁地域にはあまり関心を向けなかった。クリフォード・ギアツ(古爾茨 Clifford Geertz)によれば、人の大部分の知識は

地域的知識であり、人は様々な世界で暮らしているために、様々な考え方に基いて共同体の知識をうみだした。華西学者のフィールドワークに基づく研究は我々に、西南辺疆は多彩で活力と魅力に満ちていることを伝えた。そこで生活し労働する人々は智慧に満ち、同時に独特な知識と文化を創りだした。また、辺疆地区の特殊な地理環境や歴史的機会によつて彼らが創出した知識や文化は、華夏を中心とする文化がもたない知識や文化であり、非常に独特で価値がある。そのような研究は今日もその貴重な価値を失つておらず、多くの専門家の意見によれば、地方性をもつ文化は、総体的な文化を構築するために必要であり、特に今日、どのように民族国家を発展させ、構築するかの過程においては、国家が辺疆地区に対する認識の知識を増やすことに役立つ。実際、中央政府が多くの事柄を決定する際には、辺疆地区に関する詳細な活きた資料がなければ辺疆を理解することはできない。民族辺疆地区および辺疆認識に対する知識の増量、これらの地

域そのものに対する認識、民族特性の認識は、これらの知識や文化が国家全体の体系の中でどのように明確に認識され、把握されるかを示しており、それは今日、中国自体に新たな認識や思考を加えるための重要な手段となっている。

(2) 華西学派の研究が中国辺疆学の学科建設に対して有する意義については三点をあげる。

一 辺疆研究学術共同体を構築するにあたっては、フーコーの「知識」とクー(Thomas Samuel Kuhn, 1922-1996)の「パラダイム」を結合させる。学者たちはそれぞれの学術背景と思想をもつために、これらの思想は華西という大きな環境のなかで融通無下になぶつかり合い、相互に補充しあい、ともに発展する、すなわち李紹明のいう「兼収並蓄、豁達融通」である。多くの学科が交わるなかで、様々な学科の基層で形成される知識タイプを探し出すという集団性の研究は、知識とパラダイムの関係を比較的にうまく処理し、異同や多元的共生現象を明らかにしており、このような現象は検討

の価値がある。クーンの観点によれば、各学科の専攻はみなそのパラダイムをもつべきであるとする。今日、辺疆学の学科体系を構築し、様々な学科の研究者が中国辺疆を研究する時には、様々な学科の基層の語彙や原則を取りあげるだけではなく、型式にも注目し、双方に注意しなければならない。そうして初めて學術共同体の形成が可能となる。

二 フィールドワークや実証研究を重視するだけではなく、理論の創出や学科構築を重視する。当時の華西学派の一つの弱点は、実証調査やフィールドワーク報告が多いことである。かつて「論辺疆的特征」で述べたが、現在、辺疆研究に關しては、大量の具体的な經驗事例の中から不変の原理や結論を発見して概括することに長けておらず、一定の基礎のもとで基本的な仮説を提起し検証すること、および自分の専門領域から不変的な原理や規律等を抽出することにも長けていない。これは、今後の研究において重視しなければならない点である。学者たちは、ある程度は実証研究と理論構築の

關係を比較的うまく処理した。例えばグラハムの「羌族之習俗與宗教」や李安宅の『藏族宗教史之实地研究』、任乃強的「漢族民俗文化交流意識」等は、実証考察だけでなく、理論探求も行い、両者を非常にうまく結合させた。現在、中国辺疆学の構築時期にあつて、概念や理論にはさらに注目しなければならない。

フェーヴル(費弗爾 Lucien Febvre, 1878-1956)によれば、概念に注目するのは、科学は思考の独特な想像力のもとでのみ前進するからであり、理論に注目するのは、理論はこれまで現象の無限の複雑性をあますところなくみせてはいないからである。

もし、辺疆学科体系の構築に深く関わるとすれば、幾つかの問題に答えなくてはならない、例えば、辺疆が内包する意味とは何か、辺疆はどのように形成されるのか、辺疆にはどのような本質的特徴や変化規律があるのか、辺疆の構成とは何か、辺疆にはどのような形態があるのか、辺疆の類型と区分基準は何か、辺疆の機能とは何か、辺疆は国家の主権や利

益、境界、辺域とどのような關係があるのか、辺疆は歴史や地理、政治、人口、民族、文化、法律とどのような關係があるのか、辺疆の歴史と現実、中心と周縁、内部と外部、主体と客体、有形と無形など相反する範疇の対応をどのように理解すればよいのか、辺疆は現在と未来の發展においてどのような趨勢にあるのか、辺疆学にはどのような基本概念、範疇、分析原理、研究方法があるのか、辺疆学は歴史学や地理学、政治学、人類学、民族学、社会学、法学、管理学などどのような關連をもつのか、などである。

三 時代や形成に適應して發展すること、で、辺疆研究が国家の安全や發展、方策管理に対して總体的に関わるよう推進する。辺疆とは国家領域の辺縁の部分および地域である。袁劍は次のようにいう。辺疆には、一般地域よりもはるかに多くの社会意識や地縁政治、民族文化、国家戰略が累積されており、一般の区域や地域とは異なる。ヘーゲルにある言葉がある。およその意味は、分斷された手

は本来の意味の手ではなくなり、全体に連なる局部についてのみ把握と理解が可能である、と。この意味で、辺疆は国家全体の一地域として国家全体に連なっていることになることで、ようやく真の理解や認識、把握が可能である。辺疆の様々な形態はみな国家という主体によって画定され、その性質や範囲、規模は国家という主体の状況の改変にそって変化する。ゆえに、今日の辺疆研究の学科建設は、国家全体の管理や発展、および国際関係すなわちグローバルな管理の中の地位や機能と関係し、いかに正確に民族や国家

体制、周辺民族、国際秩序等の問題に關連するかとは、決して国内問題にとどまらず、現代化建設や周辺部との友好、ひいては人類の運命共同体等の重大な問題と密接に關連する。この意味において、中国辺疆學は決して歴史や地理、民族關係、地域管理、地緣政治問題というだけではなく、国家安全學や國家戰略學であり、國家の領土や安全、利益を研究し、國家の安全な發展や管理を図る學際的學科であり、過去の辺疆史とは大きく異なる。近年、國家が設けた國家安全學と邊疆學とは大いに關連しているのである。

梁釗韜と南方民族および移民研究

劉志揚

中山大学と華西學派とは繋がりがあ
る。第一に、民国期、四川と広東はとも
に西南に属した。第二に、北方の人類學
機關の研究者が漢族を研究したのと違っ
て、華西學派と華南の中山大学や廈門大
學の人類學者は、主に西南民族を研究し
た。第三に、中山大学人類學の創始者で

ある梁釗韜は、かつて華西大學で働き、
幾つかの大きな貢獻をした。さらに、華
西學派で人類學の四大體系が提唱された
ことは、おそらく華西と華南地區が北方
學派をかなり深く受け入れたことの表れ
であり、フィールドワークと現状研究も
そうである。

以下では、中山大学人類學と西南人類
學研究との關係について述べる。西南と
は現在では行政区画の西南であるが、歴
史上は、秦漢から民国にいたるまで、そ
の概念は絶え間なく變化した。民国期に
は、西南の範圍は六省四區を含み、梁釗
韜は西南民族を語る時、西南民族とは俗
にいう南蠻、南族あるいは苗蠻、蠻夷の
總称であり、地理上は、粵（広東）の瑤
（ヤオ）、黎（リー）、桂（広西）の瑤や壮
（チワン）、黔（貴州）の苗（ミャオ）や侗
（トン）、湘（湖南）の苗、滇（雲南）の羅
羅（ロロ、イ）や摆夷（ペー）、川（四川）
の羅羅や西番等とした。馬長寿も、西南
民族は四川、雲南、湖南、貴州、広西、
広東の六省の原始民族とした。彼らはみ
な西南を廣義の概念でとらえており、範
囲内の各民族は歴史上、利益や經濟、文
化、政治において密接に關連した。当時
の西南は文化概念であり、行政区画の概
念ではない。

人類學が真の意味で學理的研究を始め
たのは西南民族からであり、他の地域で
はない。人類學全体の發展には幾つかの

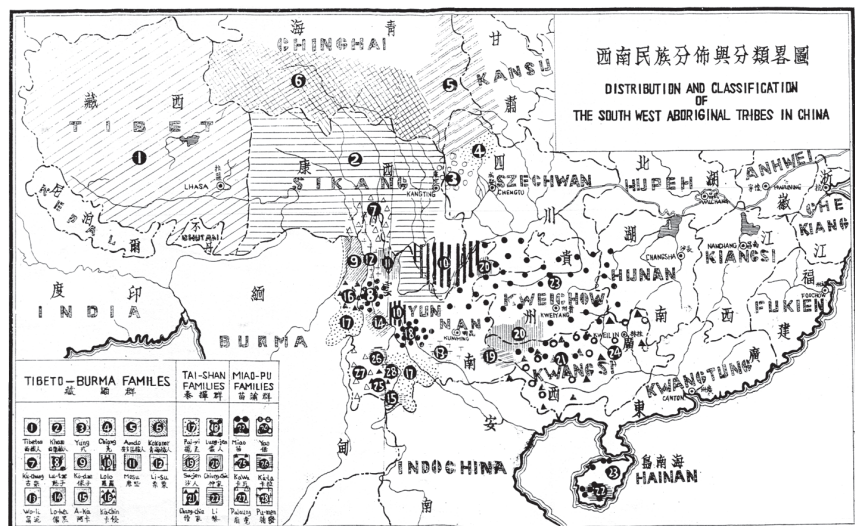
標識的特徴がある。一は、進化論である。進化論は、出現後、人類学の有力な学説となり、人類の歴史を初めて低次から高次へと段階づけた。二は、かつて西洋人にとって、古典学や歴史学、文学、政治学はみな自己の社会についての研究であつたが、一五世紀末から一六世紀にかけて地理上の大発見があつた後は自分たちとは違う世界を目にした。例えば、国家のないアフリカで人々はどうのように組織されたのかということに対する興味である。ゆえに、西洋で人類学が成立するのに重要であつたのは、西洋の民族ではない人々を研究することであつた。しかし、現在の我々は違つてゐる。およそ半分の学者が漢族を研究する。ただし、学科では初めは必ず他者を研究し、自分たち自身ではない。中国で比較的主流といえる北派、すなわち機能派は、研究対象はすべて漢族であり、実は社会学であつて人類学ではない。南方だけが国外の方法を踏襲して、他者、すなわち西南民族を研究した。抗戦期に大量の学校が内陸部に移り、書斎をでて実地に向か

い、人類学という学科が西南地区で実験を始めた。華西では、四川大学や華西大学、中山大学などによる西南民族に対する開拓的な研究が非常に重要な機能を果たした。

西南民族の研究について述べるとすれば、華西大学以外では、中山大学を必ずあげなければならない。なぜなら中山大学は全国で最も早く西南少数民族の社会と文化を研究した大学であり、西南民族の研究に関しては深い蓄積をもつからである。中山大学では、西南民族研究会が初めて設立されたほか、幾冊かの雑誌が創刊され、中国學術史で影響力をもつ二つの語言歴史研究所、すなわち中山大学語言歴史研究所と中央研究院語言歴史研究所（実は同じ研究所）が設けられた。また、中国で初の民族学会も設立された。これは日本から導入されたもので、学科の内容は民謡の採集から始まる。ただし、民族学会の民謡採集は日本とは異なる。日本が研究したのは中国であるが、中国では初めから漢族だけでなく、少数民族の歌謡や冠婚葬祭なども研究し

た。本日の報告で冉光榮が黎光明についてふれたが、我々も二〇一二年に学生を連れて大寨村に一カ月滞在した。傅斯年は自身が受けた深い国学や西洋学の教育からみて、黎光明の調査を學術的ではなく旅行記に近いとしたが、現在の我々にとっては価値ある資料である。鐘敬文は一九二七年に「惠陽肇仔山苗民的調査」を発表した。これは中山大学で教えていた時に発表した比較的早期の文章といえるが、学生に調査をさせて、その調査資料に基づいて書いたものである。また史禄国は涼山地区で一九二〇、三〇年代に調査したが、昆明に行つてからは実地に行かなかつた。これに対して梁劍韜はミツシヨン系の嶺南大学で学び、昆明でキリスト教と関係をもつた上で羅羅（彝族）地区に行つたので、彼の羅羅研究は人類学の學術的研究であり、彼以前の研究が日本人の早期の研究を含めて資料集にすぎないのに対して、西南人類学研究の非常に重要な基礎を作つたといえる。

一九三三年以後、国立中山大学西南民族研究中心が設立されたが、目的は、政



西南民族分布と分類略図

出所：梁釗韜作成。四川大学博物館整理『華西边疆研究学会雑誌（整理影印全本）』第16巻、中華書局、2014年、A 4165頁。初出は Cheng Te-k'un and Ling Ch'ao-r'ao（鄭德坤・梁釗韜），“An Introduction to the South-western Peoples of China”『華西边疆研究学会雑誌』第16巻A、1945年、24-25頁。

府および民衆に対して西南边疆問題と地区管理への注目を喚起するためである。梁釗韜は早くから西南民族を研究し貢献した学者である。一九三五年にフランスで博士号を取得し、帰国後は中山大学人類学部で教え、中国人類学南派のフィードバック重視の伝統を受け継いで強化した。一九三〇年代末に雲南省澄江撫仙湖地区のミャオ族、一九四〇年代に粵北の過山ヤオ、一九五〇年代に海南島のリー族とミャオ族、滇西のラフ、リス、ワ、トゥルン族を調査し、一九八〇年代末には四川のチャン族を調査した。楊成志が提唱した「民族学の道は二本の脚でつくる」という思想を実践した。その思想は彼の研究生である蔣某にも受け継がれた。蔣は雲南省車里（現在の景洪）で県長を務めながら調査を行った、広東省北江瑶族地区で調査した王新瑞らもそうである。また抗戦期には中山大学は雲南の澄江地区に移り、そこで多くの調査を行った。

梁釗韜が一九四〇年代に華西大学で行った重要な仕事は「西南民族分布と分

類略図」を作成したことであり、その意義は重要である。彼は当時、華西大学博物館で西南民族の文物と民族誌を収集し、資料は三百万字に及んだ。それを基礎に「西南民族分布と分類略図」（前頁

華西学派の特徴

汪洪亮

人類学の「華西学派」は、歴史上の存在である。我々は、華西協合大学が創立されて以来、西部边疆と博物（動植物等）を主な対象とした人類学の教育と研究が展開され、その活動が一九五〇年代初めまでずっと続いたことを軽視できない。この時間の長さは、民国期の他の大学とは比べものにならない。

中国人類学「華西学派」は、複雑な存在でもある。早期は外国人研究者が主体で、主な活動母体は華西大学の博物館と華西边疆研究学会（以下、学会）およびその学会誌である。学会と学会誌は数十年続き、英文によって刊行され、海外に大きな影響を与えた。しかし、ミッシヨ

の図参照）を描いた。それは現代人類学の方法によって初めて作成された西南民族分類図で、これによって彼は中山大学教授になった。

ン系大学の計画によって中国化が継続的に進められ、やがて校長や教務管理部門を中国人が担当しはじめ、中国人教授も次第に教学研究の主力になった。

華西壩の人類学も同様の過程を経た。

一九二七年、多くの宣教師が華西を離れたために、学会活動はしばらく停止されたが、一九二八年末から徐々に再開され、以後、中国人学者に開放された。一九三一年、華西大学は教育部に対して張挙凌を校長に推薦し、一九三三年に認められた。中国人学者の参加は、学会の中国化を進め、やがて彼らは華西边疆研究の主力となった。「華西学派」の複雑性は、時間的スパンが長いこと以外に、中

国人と外国人の学者が多いことがある。特に、抗戦期に多くの大学が成都に移ってきて、社会学、人類学と边疆民族学の学者が學術共同体を形成し、華西壩の五つのミッシヨン系大学（華西大学以外に、金陵大学、齐鲁大学、金陵女子大学、最後に来た燕京大学）および近隣の四川大学（例えば胡鑑民、馮漢驥）は西部边疆、特に康藏地区において卓越したフィールドワーク研究を行った。すなわち華西学派の複雑性は、ほぼその継続時間の長さに参加学者の幅広さにある。

学者の知識構造や学科背景、経歴の違いによって、華西学者の人類学と边疆民族研究は多元的な性格を表出している。歴史学や考古学の学者だけでなく、社会学や人類学、言語学、民俗学、地理学などの学者もおり、彼らは全国各地から、また一部は海外から来た。この点は、従来の學術史に書かれた人類学の南北の両学派とは異なる。両派は、ともに學術方向がそれぞれ一致しており、あるいは一人の先生を中心に同じ志の学生が集まる集団である。しかし、華西学派は基本的

このようではなく、異なるものも併存し、和諧するがそれぞれが独自に存在する。

では、「華西学派」は成立しないのかというところではない。華西壩で数十年存在したこと、中国西部の地で辺疆研究集団が多く研究成果をあげたこと、中国人類学の中国化および辺疆研究学科の設立にたゆまず努力したこと、中国人類学の高い水準を代表していること、学派

としての特色を相当程度備えていること、ある次元では中国人類学の南北の学派との違いを表しているなどがあげられる。また、次のようにもいえる。華西壩学者群の人類学と辺疆研究は、理論構築と実地研究の面に到達した学術水準と応用実践の深さにおいて、「華西学派」構築の成功を決定づけていると。

四 華西学派研究の諸テーマ

胡鑑民と四川大学の民族学

冉光榮

胡鑑民は一九五〇年代以降、従来の研究はすでにしておらず、身体もすぐれなかったため、研究成果はあまりない。しかしそれまでの研究のなかで、チャン族研究は頂点にたつものといえる。

胡鑑民は一八九六年生まれ、一九二二

年フランスで社会学博士修了学位を得たが、在学期間はかなり短く、研修生待遇であった。なぜ社会学を学んだのかという私の質問に、彼は謙虚に次のように答えた。当時、社会学の影響力は人類学よりはるかに大きかったからで、そのため

帰国後職を得るのはかなり楽だったと。

一九二〇年代、民俗学や社会学等の学科間の境界は明確ではなく、社会学は、時には歴史学と同じ系統であったため、研究領域がかなり広がった。彼はドイツでも社会学を深く学んだ。一九〇〇年代初期の学術界の構造は現在とは異なる。彼は欧州での滞在がかなり長く、一九二二年から三一年までの一〇年間に及ぶ。これは当時としては非常に珍しく、そのため彼は社会科学理論における学習と研究の範囲が広く、基礎がしっかりしており、水準も高い。在学生に尊敬され、著作スタイルは徐中舒とは全く違っており、思考や理論は西洋式であった。

彼は帰国後、初め中央大学社会学系に勤め、一九三六年から四川大学教育系教授となり社会学を担当した。一九五二年の院系調整では、大学内部の構成調整によつて西洋式からソ連式にかわり、学科は細分化され、専門化された。院系調整は後に改革開放以前まで教育界に多くの影響を及ぼした。当時、教育系は西南師範大学に合併され、彼も歴史系に移って

しばらく歴史系の主任となった。これは歴史系の同僚の彼に対する尊敬を示すもので、一九五四年に徐中舒が引き継ぐまで担当した。歴史系では原始社会史をもち、短期間であったが中国古代思想史と人類学通論ももった。

徐中舒は、岷江流域のチャン族と甲骨文の羌とは関係があるとする。殷商時期に羌は西北方面全体に散居しており、後に黃河流域に集居し、さらに南遷した、これは移遷の過程であるが、その脈絡は中斷していない。羌は文字をもっていないが、その歴史上の地位や影響力が低いということではない。当時、羌は大族で、殷商と拮抗していた。徐中舒はチャン族の歴史上の地位を強調しており、馮漢驥、胡鑑民もみな岷江上流域に行つてチャン族を調査した。一九三七年六月、胡鑑民はチャン族地区（汶川県、理県、茂県）に行つて調査した。当時、チャン族の分布は現在ほど明確ではなかった。しかしこの集団の古代文明に関する意義は重大であつた。一九四一年、最も著名な「羌民之信仰與行為」（二万七千字）、

一九四四年に「羌民的經濟活動型式」を発表した。これらはわずか二篇にすぎないが、チャン族研究の頂点にたつ。彼はチャン族の信仰について研究し、信仰で最も主要なものは崇拜であり、チャン族には祭山と求雨があるが、彼は求雨を研究した。なぜなら祭山にはチャン族女性の参加が認められていないからである。彼は人と自然との関係から求雨を分析した。求雨儀式の参加者は若い既婚の女性である。儀式前夜、女性たちは夫と関係をもたなくてはならず、二日目にはそのことを黙々と神々に告げ、歌をうたう。

彼は詳細に観察して歌詞と歌譜を記録した。歌は人と自然との関係をうたつてゐる。古人の觀念では、農作物の成長は人の影響を受ける、人の繁殖は性行為によつて実現されるので、自然も同様であると考ええる。北欧の農民は、種播きと収穫時に必ず歌をうたう。漢族は胡瓜を植える時に男女のことをうたう。

彼はどうしてこのような秘密の資料を手に入れることができたのか。数年後、私がチャン族地区に行つて現地幹部に

求雨儀式についてたずねた時、彼らの答えはとても曖昧だったが、これに関する資料は必ず存在すると思う。チャン族の「瓦爾俄足」（毎年五月五日、女神沙朗を山上で祀る女性の祝日）では、その目的は既婚女性が未婚女性に生育と理財の知識を伝授することにある。彼がこれらの秘密の情報を手に入れることができたことは、仕事における誠実で純粋な態度が現地の人々の信頼を得ていたことを示している。例えば、瀘沽湖のモソ人の「求婚」（妻問い婚）習俗では、私の調査状況からいえば、どんな女性も求婚のよい情報を私に教えてはくれない。たとえ老婆でも妊娠のことを話してくれない。かつて雲南で会議があつた時、出席者は一部を除いてほとんど瀘沽湖出身で、漢族は私一人だったので、彼らはみなで私一人を問い詰めた。胡鑑民が記録した女性の求雨に関する資料は貴重であり、最後の、最も特徴的な、最も完全なものである。もし彼がこの情報を探りだしていなければ、この領域は空白となつていた。私も瓦爾俄足の資料を探つて、彼らがど

のように生育知識を伝承しようとしているのか明らかにしたいと思った。高度の段階に達していない社会では、最も安定している組織は家庭であり、家庭の安定は人口と財力の増加に基づく。瓦爾俄足はこの問題を解決するためにうまれたといえ、家庭の盛衰を決定する。「婦女節」と呼ばれる、重要な祝日である。

彼はチャン族のトーテムについても研究した。チャン族は自分たちを羊の子孫とするが、彼は、チャン族のトーテムは成熟してはおらず、トーテム崇拜とチャン族の放羊とを過度に結びつける必要はないとする。彼はまずトーテムとは何かを解釈してチャン族のトーテムについて考え、同時に世界のその他の民族と比較した。チャン族研究を世界に紹介し、オーストラリアやアメリカ、アフリカ、シベリア、インド等の民族と比較した。チャン族を世界に理解させ、チャン族の発展についてより深い認識と分析をした初めての人物である。

〈資料〉「原始社会史」

胡鑑民は、四川大学では古代史（週六コマ）のほか、原始社会（週二コマ）を担当した。当時は年齢も高く（六〇代）、身体の調子もよくなかったので二階の教室に上がるのも息苦しかったが、学生が一階に待機して書物を持って助けた。彼は、普段はあまり話をしなかったが、講義は活き活きと話し、しばしばフランス語がでた。古代史には教科書があったが、原始社会史にはなく、すべて彼自身が編集した。

私は一九五五年に入学し、二年次に歴史系の専門学科に進んだ。専門に進級する際に五人が民族学を選んだが、私が選んだのは胡鑑民の影響だった。後に徐中舒の博士研究生になった。徐中舒の研究の成功には二つの「工具」がある。一は、甲骨文字と経文を直接読む古文字の能力、二は、歴史上の少数民族と現在の少数民族という異なる発展段階にある形態を比較し、民族学を利用して先秦の社会構造を認識したこと、さらに八旗制度と遼、金を研究したこと、その「二重の

根拠」は王国維より成熟している。彼は民族方面の資料を重視していたが、蒙文通『周秦少数民族研究』も同様である。

胡鑑民は授業の時、主にインドネシアのスマトラ島での調査やヨーロッパの早期の状況等を講義した。自己の経験したことを話し、完成したテーマはなかった。後に五人がレポートを書く時、私はあちこち資料を探して、費孝通「広西花籃瑶調査」をみつけた。読み終わってその中の婚姻形態に興味をもち、「広西花籃瑶婚姻形態の研究」三千字余りを書いて、彼に提出した。彼のお宅で、彼の千字余りの評価をみたが、私の婚姻研究は視野が広いとあった。当時の私の考えでは、原始農業の段階では、採集が重要であり、それは基本的に女性が行う、また家庭の副業は家庭収入の重要な部分である、よって原始農業では女性の地位が高い。「夫が耕さなければ、一家は餓え、妻が機織りをしなければ、一家は貧しい」、労働力の成果は極めて限られている。当時、女性には常に尊重され、男女の交流は非常に自由で、まさに女性の地位

を決定したのは女性の生産能力にあった。私は師が私の論文を褒めてくれたことに心から感謝し、一生、民族学を研究しようと決意した。これまで誰かの影響

を受けて一生の仕事を決めたというのを聞いたことはあったが、自分がそのようになるとは思ってもしなかった。

グラハム（葛維漢）のチャン族研究

耿 静

グラハムは、本来伝道士であり、標本を収集する科学者、考古学者、人類学者でもある。我が国の自然科学や學術研究に大きく貢献した。かつて何度も藏彝走廊地区で調査し、実物標本を収集し、特に、チャン族とミャオ族の研究に関する功績は大きい。以下ではチャン族研究を事例として彼の業績を述べる。

グラハムの學術研究の経歴は、三段階に分けられる。第一は一九一三年から三二年までの初期段階で、中国語と史書典籍に関する知識を学び、仏教にも通じ、主に現在の四川省宜賓および周辺地区で布教活動を行い、余暇には興味にまかせて現地の風俗習慣についての調査記録を作成した。一九一八年にはアメリカの国

家博物館（スミソニアン博物館）のために生物標本の収集を始め、活動範囲はミャオ族地区まで拡大した。以後、研究のために三回アメリカに帰国して学問的教育を受け、ジョージア大学の宗教、心理修士号と人類学博士号、ホイットマン学院の名譽科学博士号を得、自身の身分を上昇させた。

第二は一九三二年から四八年までで、學術研究が蓄積された発展上昇期である。この時期に華西協合大学で勤務し、考古学者、人類学者として多くの成果を得た。一九三三年には華西博物館館長になり、三三年には三星堆の考古発掘を組織し、何度も藏彝羌地区を調査した。第三は一九四八年から六一年までで、

研究生活の成熟期であり、中国での三六年度の調査資料を整理して生涯で最も重要な三本の著作、『川苗的故事與歌謡』『羌族之習俗與宗教』『中国西南的封建宗教』を書き上げた。布教と同時にミャオ族の調査を行い、さらにチベット地区では、打箭炉（現在の康定）等の地域で風土人情の調査をし、一九三二年には成都に住んで考古学や人類学に興味を集中した。研究方法は主に三つである。伝統的な史学研究方法、人類学のフィールドワーク、村民への聞き取りによる比較研究（わずかに数十日の調査にすぎなかったが）、資料を成都に持ち帰って補充調査を行い、帰国後調査資料について整理と研究を進め、ついに民族誌的方式で現地の研究成果を著した。彼の身分の変化は、四川での実践と一つ一つ関係があり、宜賓での自然標本の収集に始まり、最後には人々の調査研究を行った。學術背景に加えて興味が変化したことで、彼は伝道師から人類学者に転身した。

チャン族地区での研究は主に四段階に分けられる。第一は、一九四二年夏、汶

川から茂県、松潘地区に行つて調査し、第二は、一九三三年夏、汶川、理県一帯の村落調査を行い、第三は、一九四一〜一九四二年に、茂県、理県、貴州等できらに多くの村落で調査をし、第四は、一九四二〜一九四八年に、短期調査を実施した。調査したチャン族地区は現在のチャン族地区の範囲より狭く、重点は汶川県、理県、茂県の三つの地域で、訪れた村落はみなチャン族の典型的な村落であり、伝統文化の保存がかなり良好な地域である。現在のチャン族地区は、北川県のような彼が調査しなかつた範囲まで拡大している。

グラハムは、『華西辺疆研究学会雑誌』に五五篇の論文を発表したが、うち二二篇は少数民族地区に関したものでチャン族六篇、ミャオ族七篇、チベット族八篇、イ族一篇である。一九二四〜一九四六年は生物標本や考古、チャン族の習俗宗教、自然歴史等の方面の資料を収集し、うち一九四一〜一九四二年は辺疆服務部の考察組副組長として岷江上流一帯のチャン族地区調査等に参加し、活動範

囲の拡大や各種資料の収集が、後のチャン族研究の基礎となった。

チャン族の習俗と宗教の点から、彼のチャン族に対する七つの見方がわかる。

一に、居住範囲は主に岷江上流と雑谷脳河流域である。二に、チャン族の歴史については漢文史書の羌の歴史と同じとし、当時の学界の認識と一致する。三に、チャン語はチベット・ビルマ語派に属し、その他のチベット語とは区別し、単独の語支とする。四に、体質は形質人類学からみれば黄色人種のチベット・ビルマ語派に属する。五に、社会習俗については衣食住行や冠婚葬祭等を含む。六に、宗教はチャン族が信じる神を詳細に調査して、チャン族は多神信仰であるとし、大量の経文や法事を記録し、トールナスとの対話も記した。七に、文化変遷はまさに漢族による融合であり、学校教育や異民族間の通婚、言語の影響の結果であるが、なお今後の検討課題である。

グラハムは文化相対論の影響を受けており、チャン族文化についての分析は多くないが、一方でフィールドワークで収

集した大量の貴重な資料や記録は資料的価値が高い。彼の言葉にはチャン族に対する尊重がみられ、今日の研究に参考となる。李紹明によれば、彼は初期の華西人類学のリーダーであり、人類学研究と伝道師の仕事をうまく調整し、人類学に重きをおいて文化の多元性を明らかにした。他の伝道師とは違ってキリスト教の立場からチャン族の問題を解釈することにはなかつたとする。グラハムは歴史上の人物として、時代の限界性はあつたものの、中国民族学の構築に一定の特殊な働きをしたといえる。

西南藏族研究

袁曉文

まず、川西南藏族研究の概念について述べる。一九七〇年代中期、当時涼山彝族自治州の甘洛、冕寧、越西のチベット族は「西番」とよばれた。彼らは民族識別を政府に要求したため、四川省民族事務委員会は専門家を組織して調査を行い、張学昌が「涼山州内西番調査報告」をまとめた。一九八〇年代初め、四川省民族事務委員会と四川省民族研究所、西南民族学院、涼山州民族事務委員会は調査を組織した。主に注目したのは雅砻江流域で、安寧河流域には基本的に注目しなかった。西昌、冕寧、甘洛、越西、喜德、塩源、木里、石棉、漢源を含む西番

を全面的に調査し、何耀華は「川西南藏族史初探」を書いた。彼はまず川西南チベット族の概念を述べ、川西南チベット族は大渡河以南から雅砻江下流域に分布し、そこには九種のチベット族——納木依、拍木依、博巴、多須、里汝、爾蘇、

魯蘇、木尼洛、須米が暮らしている、とした。後に、「康巴」「東蛮」と宋朝の歴史的関係で、「東蛮」は涼山彝族自治州付近に居住する非康巴のチベット族の歴史的総称であるとした。多吉や廖楊も類似的の観点を述べたが、「西番」の区分に爾蘇を含まない学者もいた。

川西南チベット族の多統人（以下、タシユ）は、大渡河以南のチベット族群のなかで最も漢文化の影響を受け、文化に内包された意味や隠された現象が最もみられる。基本的に漢化し、私のように簡単なタシユ語しか話せない。幼少時は漢族地区で暮らし、家でチベット語を話すことを許されなかったからである。現在、タシユ語を話すことができるのは一〇人に満たない。タシユ語はシナ・チベット語系チベット・ビルマ語派に属するが、語群は確定しておらず、チャン語群爾蘇方言の中部方言に属するとする、

古ギャロン語の梭磨方言により近いとか、イ語により近いとする者もいる。

冕寧のタシユ・チベット族は、建国後の長い間、チベット語や漢語、イ語も話せ、現地村落の多くの漢族も含めて文化大革命前に基本的に現地の民族言語を話せた。移住や通婚等の原因によって、タシユ族群には爾蘇や里汝、木雅、納木依、博巴等が含まれている。タシユは主に冕寧県安寧河流域兩岸に居住し、主に冕寧県城、大橋鎮、惠安郷、城厢鎮、福星鎮、後山郷、回龍鎮等にいる。およそ石棉、九龍、冕寧を境界とし、西南チベット族と隣接して居住する。タシユは主に農業に従事し、水稻やジャガイモ、トウモロコシ、豆類を栽培し、牛、羊、鶏、豚を飼育する。比較的特殊なのは飲食である。家に客人が来たら、「*chag*」を用意する、生の羊肝あるいは生の牛肝をきれいに洗って刻んでまぜる。タシユは被り物を着け、漢族とは異なる。

タシユ・チベット族の名称の由来については、元末明初の時、『四川土夷考・寧番衛図説』に「脱蘇」とあるが、「蘇」

の意味は不明である。タシユを研究した学者は方国瑜、何耀華、張全昌、龍西江、さらに国外では西田龍雄（日本人）、Kata Chikwa（フランス人、言語学研究）、国内では黄布凡、李衛斌、袁曉文、陳東、劉俊波、韓正康、黃德和、王玉琴、古濤、趙聯、焦虎山（アルス・チベット族）、楊德龍（アルス・チベット族）等がいる。代表的な著作・論文は二〇冊余りあり、うち袁曉文編に『藏彝走廊族群互動研究』『多統藏族——藏彝走廊中的歷史記憶與族群認同』『爾蘇、多統藏族研究体系關係辨析』等がある。現在はかなり多くの人々がこの地域に対して、特に小エスニック・グループ研究として注目している。このほか知るところの研究課題が三つある。一は、私がすでに終了した国家社会科学基金会の項目で、川西南チベット族とその他の民族との關係を事例として、最初の調査地は川西南地区で、チベット族とその漢族、彝族およびその他の少数民族との關係について論じ、ほかに青海省、甘肅省、雲南省迪慶藏族自治州およびその周辺地域

も調査地とした。二は、國際瀕危語言基金會の項目で、彼らと私の共同研究である。目下、初步的研究が完成し、次に教材編集の準備に入っている。幼稚園と小学生用の簡単な教材である。タシユの総人口は四千人余りなので、人々に学習意欲をもたせることを目的としている。三は、昨年の国家維保基金項目「四川冕寧多統語」で、生活全般に関わる言語、約八、四〇万字を収集しており、これを基礎にさらに同様に二回実施する。

民国期の四川西北地区におけるアヘンの栽培売買と族群政治——雑谷脳河流域を中心に

——王 田

雑谷脳河流域は岷江上流域に位置し、その地理上の位置は特殊である。ケシが雑谷脳河流域に導入された背景は次のようである。清末民国初年、流域の官界と上層部はすでにアヘン取引の習慣に染まっていた。アヘンは主に外地から来た。雑谷脳河流域では、ケシ栽培は一九一九年頃に始まったが、一九二二年

目下の研究の特徴は以下の四点ある。

- (1) 多分野による総合的研究…かつての研究は基本的に歴史学であり、民俗学研究は少なかったが、現在は歴史学、人類学、言語学、民族学、民俗学、建築学、政治学、考古学などに及ぶ。
- (2) 自民族研究者の成長と文化的自覚の向上。過去の研究に対する批判や賞賛の態度がみられる。
- (3) 研究の拡張と領域の拡大。
- (4) 研究の開放と多国籍研究者の参加。

以後は、四川の軍閥と理番当局による利益の追求と妥協の結果、流域内の広い地域で栽培されるようになり、支流や高山でも栽培された。ケシの収穫は、海拔高度の差によって、河谷地区では六月に開始し、高山地区では八月であった。旧暦六月〜九月は、ケシを収穫しアヘンを販売する季節

であり、「趕煙会」とよばれた。労働密集型産業として、地域内外の人々の盛んな往来を促した。後番（黒水河流域）、四土（梭磨河流域）、懋功（小金川流域）では、ケシ栽培は規模が巨大で、雑穀の栽培よりはるかに大々的であった。内地の様々な人々がこれらの地域に出入りし、大多数が雑穀河流域の峡谷の道を通った。

中国西北部から来る商人、すなわち甘肅洮州の回族商人の進出にもなつて、馬爾康はすぐに四土や大小金川、綽司甲一帯のアヘン集散地となり、彼らはさらに地域政治の有力者であつた蘇永和と親密になつた。趕煙会は、成都平原と雑穀河流域、四土、黒水、小金、阿壩草地、甘南夏河、洮州などの広範な地域とそこの人々と繋いだ。

雑穀河流域と周辺地域のアヘン運搬において、煙幫（アヘン運搬を護送する武装集団）と秘密結社、すなわち袍哥は、一貫して密に繋がっていた。袍哥、煙幫、軍閥の関係は錯綜して複雑であり、アヘンの運搬と売買においては明確に分業化されていたが、利益は入り組み、はつきり分けることは難しかった。

政府はかなり厳しくアヘン禁止政策を行つたが、後番地区では政府の力は弱く、前番地区は税が苛酷で非常に多かつた。アヘン禁止政策の問題では、雑穀河流域内の漢人有力者たちは政府当局と決裂し、賈開允をリーダーとして県長の徐劍秋を訴えた。

※詳しくは、本誌所収の王田論説を参照。

華西边疆研究学会雑誌

周蜀蓉

華西边疆研究学会は、一九二二年三月二四日四川成都の華西協合大学で成立し

た。近代中国で初めての華西边疆研究を目的とした国際學術機構で、華西の政

治、人文、風俗習慣、自然環境、およびこの四つの要素が少数民族に与えた影響を研究し、学会誌『華西边疆研究学会雑誌』を刊行した。

一 華西边疆研究学会

華西边疆研究学会は、初めは、外国の宣教師によって設立された小規模な學術団体であり、会員は一名で、大部分が華西の宣教師と華西協合大学の教授であつた。学会の筆頭責任者はアメリカ籍の形質人類学者で解剖学者のモールス（莫爾思）で、主な会員は、ダイ（戴謙和）、ウィルフォード（胡祖遺 E. C. Willoud）、ブレイス（布礼士 A. J. Brace）等、英国王室協合会員で地理学者のエドガー（葉長青）を名誉会員とした。しかし、一九三〇年代、学会は閉鎖的な伝道圏の枠を越えて、国際的な學術団体へと発展した。抗戦期に多くの大学や研究機構が日本の侵略を逃れて華西地区の四川や雲南、貴州の三省に移つてきて、大量の研究者が同学会にも参加し、西南边疆が国家復興

の戰略上に重大な地位を占めるようになったことで、学会は空前の繁栄期を迎えた。諸学科の人材が参加して学会の研究水準や影響力は日増しに向上し、その構造も根本的に変わり、中国人学者が組織機構と科学研究の中心となった。文化事業の内遷によって華西に來た外地の学者たちと少数の海外研究者が参加したことで、学会は世界に向かう眞の國際的學術機構となった。「跨領域、多学科」は同学会の研究の特徴で、會員の研究成果は『華西边疆研究学会雜誌』で発表された。華西边疆研究学会は民国期の西南边疆研究において最大の影響力をもつ學術機構であり、一九五〇年まで活動した。

二 『華西边疆研究学会雜誌』について

『華西边疆研究学会雜誌』（以下、学会雜誌と略）は、華西边疆研究学会が国内外に向けて刊行した、英文総合學術刊物である。近代中国において最初の「華西边疆研究」を目的としたもので、外国人宣教師によって創刊された近代華西で

初の外国語學術刊行物である。一九二二年四月に成都で活動を始め、一九二四年創刊号を発行、一九四〇年から人文科学と自然科学の二つに分かれた。一九四七年停刊となるまでに一六卷二〇冊（一二卷以後はA・B卷）、三三九篇が刊行され、さらに二本の増刊号『英嘉戎詞彙表』『華西族群體質人類學觀測記錄表』を加えて、あわせて二二冊が刊行された。

学会雜誌は、かなり厳格な綜合學術刊行物である。掲載論文の統計から研究の重点の所在をみると、最多は生物学で、次は宗教、考古と続き、四位が民族學で、あわせて一八六篇、全体の五四・八%を占める。明らかなのは、人文社会科学の領域では華西边疆地域の民族（主にチベット族）や宗教、考古方面が多く、自然科学領域では生物学研究に集中していることである。このほか、歴史や文学、地理、言語類もそれぞれ十数篇あり、さらに音楽や教育、医学、農学、氣象、環境、交通、建築等もある。

民族学や人類学は学会の関心の中心であり、華西边疆地区の一部の少数民族に

についての最も早い人類学研究である。代表的な研究者はモールス、グラハム、李安宅で、彼らの研究成果は華西地区の人類学の學術的發展の中心路線である。医学者のモールスは学会發起人の一人で、会長でもあった。その研究は形質人類学に集中し、一九二四年發表の「關於藏東部落構成員人類学数据記錄」は華西形質人類学研究の最初の代表作である。一九三〇年代中期、三回にわたる華西形質人類学調査を主導し、漢、ミャオ、チベット、チャンの各民族の血液型を収集して『四川人的血型研究』を著した。一九三七年、專著『華西族群體質人類學觀測記錄表』を發表して、四川の十民族の健康な人三〇五一名に関する七〇項目の検測データを紹介し、一九三八年にはイギリスの『人類学』(Man)に掲載されて世界の人類学界から注目された。

アメリカのグラハムは、一九三〇年代の華西边疆研究の中で最も代表的な人物の一人である。一九一一年に伝道のために四川に入り、華西で三八年間暮らし、華西各地で一五回調査して動植物の採集

と人類学の研究を行った。一九三二年に華西協合大学博物館館長となり、三四年には広漢三星堆遺跡の考古発掘を行い、三五年に「漢州発掘簡略」を発表、また四川のミャオ族、チャン族、チベット族の習俗と宗教を研究して「川苗習俗」「藏族宗教節日及儀式」を発表し、華西地区の考古学、博物学の発展に大きな影響を与えた。

李安宅は、一九四一年から華西協合大学に勤め、社会学系教授、辺疆研究所常務所長を歴任し、民族学や宗教学、社会学、蔵学研究に一生をささげた。その学術成果はすばらしく、高い名声を得た人類学者で、学会の一九四〇年代の人類学研究を代表する。学会のトールンス（陶然士）やエドガー、ダイ、鄭徳坤、林名均、林耀華等も人類学研究に非常に重要な貢献をした。学会は、華西地域人類学の先駆的な研究に「すべての学術を取り入れ、史と誌を結合させ、辺疆に関心をむける」という研究スタイルを徐々に形成し、中国人類学研究のなかに独自の特徴をもつ「華西学派」を創出した。

三 「華西辺疆研究会」の価値

著名な民族学者である馬長寿は、辺疆研究十周年（一九三七—一九四七）の回顧で、学会雑誌を「最も長い歴史をもつ」と述べた。一九二〇—四〇年代の華西研究各領域において学術の最高水準を示し、宗教学や民族学、民俗学、人類学、考古学、生物学、教育学、地質学、彝学、辺疆史地、華西キリスト教伝播史、中西文化交流史、西南形質人類学、音楽、美術、農学等において重要な地位を占める。現在の研究者が中国西部の社会、政治、経済、文化、科学等諸方面の研究をする際に不可欠かつ貴重な文献である。

現在における価値は次の三点にある。

(1) 学会雑誌は、近代以来、科学的方法によって華西辺疆地区を最も系統的全面的に研究したが、うち多くの重要な研究は中国西南辺疆研究の先駆けといえ、研究成果は今日にいたるまで貴重な資料である。

学会が成立する以前、国内には西南辺疆を主な対象とした科学的研究はなく、学術的な研究団体もなかった。徐益棠は、民国以来、「辺疆の総合的研究には誰も注目しておらず、我が国の民族学は未発達であり、当時は取り上げるべきものはなかった」という。中国において現代の学術的範疇におさまる辺疆研究が始まったばかりの時に、学会は華西辺疆研究に力を尽くしており、疑いもなくこの領域の先駆者といえる。学会の価値と影響もまた近代西南辺疆研究全体に一貫している。特に抗戦が始まって国民党政府が内陸部に遷り、西南辺縁が国家復興の過程において日増しに意義を強めていく中で、学会はその高い学術水準と長期におよぶ学術成果の蓄積によって、西南辺疆研究のブームを牽引した。

学会の重要な地位に呼応して、学会雑誌も成果の発表と展示の舞台として西南辺疆研究の権威ある刊行物となった。掲載論文の大多数は、当時の西南辺疆研究の第一人者による先駆的な研究である。李紹明は次のように述べる。当時の華西

学者の著作を今日再読すると、中国人類学史上における重要な地位と巨大な貢献を感じると。王建民も、グラハム等は華西边疆研究学会を創設し、中国人類学の早期の研究において「確実に重要な作用」を果たしたとする。このほか、学会の生物学、考古学、民族宗教問題上の多くの論文は当時の学術界の最高水準を示している。また、自然科学研究を例にとれば、リジェストランド（李哲士 S.H. Liljestrand）「川藏交界薬用植物学調査」や何文俊「四川金花蟲科甲蟲之分類分布及經濟上之重要」等の論文は、応用された科学理論とモデルが後学に多くの啓発をあたえる。例えば、劉承剣が発表した華西両生類に関する一篇の論文は、学界で大きな反響を引き起こし、現在も中国の両生類の經典とされている。また幾人かの植物学者、例えば胡秀英の華西ナミノキ等の植物研究、方丈培の峨眉のツツジ研究、吳微鑑の瑞麗流域の植生研究等はみな当時の植物学関連領域のフィールドワーク研究の先駆的著作で、これらの領域研究の最高水準を示して

いる。

学会雑誌は、二〇世紀前半の学術界における西南边疆についての最もまとまった系統的な研究成果を提供しており、その権威は当時すでに学術界において広く認められていた。陳永齡は二〇世紀前半の中国民族学に言及しているが、外国語雑誌は、主に華西大学边疆研究学会編集『華西大学边疆研究学会雑誌』や輔仁大学出版『華裔学志』『華裔学志專刊叢書』、および輔仁大学に付設された人類学博物館雑誌『民俗学志』等に集中する。一九四〇年代になって、学会は国内の学術機構と長期の交流関係をもっただけでなく、国外のイギリス、アメリカ、カナダ、ドイツ、スイス、スペイン、オーストリア、ベルギー等の国家の学術機構とも関係を構築した。学会雑誌は、国際学界の広汎な承認を得、華西边疆研究の権威ある学会誌とされた。

(2) 学会は研究に西洋の知識と研究方法を導入した。特に、西洋の認知概念や知識の構築の具体的な実践は、近代の華西边疆研究の学術的転換に大きく作用し

た。華西边疆研究を目的とした最初の現代的学術機構として、学会および学会雑誌は西南边疆の科学的研究の重要な指標となり、同時期の中国人研究者および後進に西洋の学術研究の基本原則を明確に示した。学会は西洋の学術団体の組織モデルを完全に導入し、学術講座の主催や実地調査の実施、雑誌の出版などの方法によって、西洋の学術理念を取り入れた。これは、疑いもなく、中国学術研究の近代への転換に明確な規範と方向性を与えた。この意味において、学会と学会雑誌は、現代の西南边疆研究の構造と学術的基礎を直接定めたといえる。

華西边疆の早期の研究実践において、学会雑誌は「西洋型学術」を西南边疆研究にいかにか系統的に運用するのを示した。これによってかなりの程度、近代の西南边疆研究の方法と方向性が定まり、近代学術研究の制度や関連学科の分類、認知概念、知識の構築等が具体化された。例えば、グラハムの研究はアメリカ文化人類学の父ボアス（Franz Boas, 1856-1942）の影響を受けており、ボア

ス理論はグラハムによって翻訳され、華西協合大学の人類学、考古学および博物学の発展に貢献した。やがて学会の研究主体は、次第に宣教師から職業研究者へと変わり、外国人主体から大量に参加した中国人学者に変わった。これは、学会が世俗化、専門化、中国化の過程を経たことを明らかにしている。専門的研究機構の推進と学会誌の継続的な出版、すなわち「専門化」は二〇世紀の華西边疆研究の学術発展の主要な形式となった。

(3) 学会雑誌は、近代西洋の華西認識である。特に、それは西南边疆の一次資料であり、中国と西洋の文化理解の架け橋といえる。このほか、掲載論文には大量の西洋の観念の表現があり、それは今日、西洋の「科学帝国主義」や「東方学」といった言葉の背後に隠された西洋文化を再認識するために重要な歴史的資料であるといえる。

一九世紀以来、西洋の中国边疆に対する認識は、主に宣教師や少数の探検者、断片的な旅行記類の文章によるものであった。これは、中国西部の边疆に対す

る西洋の認識を長期にわたって神秘主義に陥らせた。これに対して学会雑誌は、科学的で厳格な方式によって、西洋に向けてさらに明確で具体的な真の華西を示した。この点からいえば、学会雑誌は科学の実証的な方法で華西の神秘のベールをはぎ、西洋が中国の内陸と西南縁辺を認識する重要な典拠となった。科学的実証は、西洋の資本主義が拡張する過程で近代世界の秩序を構築する重要な手法である。学会の会員は旅行や実地調査を通して、中国西南地区の民族や地理、社会、自然等の西洋にとって未知の具体的知識を西洋の知識体系に取り入れ、中国西南边疆を世界知識の構造の中に組み込んだ。学会雑誌は、西洋世界が中国西南边疆を理解するうえで絶好の得難い材料であった。

学会雑誌の重要な価値は、やはり歴史資料として、西洋の「科学帝国主義」を反省し、「東方学」の背後に隠された西洋文化を再認識することを可能にすることにある。学会が西南边疆の知識を生産していることは、実は、近代西洋の政治

的植民地拡張の意図が内在していることと関係する。学会の成立は、本来は、資本主義文化がグローバルに拡大して、その言語の権利が求められた結果である。

二〇世紀初め、ヨーロッパ諸国やアメリカでは東方学、人類学、民族学、宗教学、社会学等の学問が非常に進歩し、西洋の学術思想や理論方法が学会の現代的意義をもった边疆研究のために学術理論や方法を支えた。さらに西洋列強の政治および軍事的征服にともなって、西洋人のフィールドワーク博物学研究も直接中国内陸部に入ってきた。

学術面からみれば、西南边疆研究の現代的変化は、西洋学術を基準とした「西方学」によって伝統の中国学に対して模範と原則を示す過程であるだけではなく、中国本土の西南边疆研究が西洋からの衝撃に対して絶え間なく発展し、次第に成熟する過程でもある。早期に学会に参加した宣教師は大部分が探検を熱望し、川康边疆に対する好奇心に満ち、一九二〇年代に個人あるいは集団で盛んに探検し、研究した。彼らは、科学的論文

あるいは非公式の旅行記や通信等の方法を通して、西洋に向けて「未知」の地の探索と理解を伝え、未知の地の各種事物の定位、製図、描画を通して、これらの「未知」の要素を西洋の知識体系の一部にした。学会は、華西の科学実践の過程で、サイード (Edward Wadie Said) の「東方主義」(オリエンタリズム)や范尧迪 (Fa-yu Fan) の「科学帝国主義」の影響を避けられず、また、東西文化の交流

の過程における協力と抵抗、学術様式における半植民地と独立化等の諸問題も含んでいる。しかし、どのような視点からみても、『華西边疆研究学会雑誌』の近代西南边疆研究史における意義と価値を無視することはできない。

※本論は、四川大学博物館整理『華西边疆研究学会雑誌(整理影印全本)』第一卷(中華書局、二〇一四年)に「概論」として掲載されたものである。

五 華西学派の学術体系

人類学「華西学派」の理論体系の現状と方向——張琪

現在までの華西学派の研究を整理し、関連研究を通して、華西学派の理論の特徴と使用可能な方法と方向について初步的考察を行う。

李紹明「略論中国人類学的華西学派」

(二〇〇七年)が発表された後、学界では華西学派に対する関心と討論がおき、第一回目の小さなブームがうまれた。残念なのは、李論文に啓発された後続の研究には彼が示した全体的な視点が欠けて

いることである。後続研究は個別研究を主としており、二つの方向がある。一は、華西学派の代表的な学者とその代表作について分析し、それぞれの理論の起源と成立を探索する研究であり、二は、華西学派が依拠する機構、例えば学会や刊行物の理論や成果の研究である。

華西学派の研究者に関する理論や成果の研究は三段階に整理される。

第一段階は、華西学派の萌芽期(一九一〇—一九三七)である。研究者は華西大学の西洋人が主で、伝道師であるだけでなく、教師であり研究者でもあり、人類学の専門的訓練を受けた者もいれば、神学訓練と伝教使命の影響を受けて人類学研究を進めた者もいる。これは完全な学科体系を完成させるに至らなかったが、博物学の基礎的データを広範囲に収集し、専門化された人類学のフィールドワークも行われた。この時期の成果はエドガー(葉長青 James Huston Edger)、トールانس(陶然士 Thomas Torrance)、グラハム(葛維漢 David Cockett Graham)の三人の伝道師の研究に集中されるが、

二種の衝突があった。一は、エドガーおよびトランスの神学式研究と、グラハムの人類学に基づく科学主義的研究の衝突であり、二は、エドガーとトランスのオリエンタリズムに基づく植民地統治者側の心情と、グラハムの人類学に基づく他者の心情の衝突である。エドガーからトランス、さらにはグラハムに至る過程である種の変化がみてとれる。すなわちグラハムがもたらした専門化された人類学の学問体系や理論、方法は、博物学から人類学への転換を実現させたといえる。この時期に用いられた主な理論は、進化論、伝搬論対歴史論である。

第二段階は、華西学派の形成と成熟期（一九三七～一九四五）である。中国人類学者が主体となり、華西に移ってきた人類学者と華西大学の人類学者が影響しあい、南派もいれば北派もあり、衝突と補完を経てともに華西大学人類学の特色を形成した。それぞれの代表的人物は、南派は徐益棠、柯象峰、馬長寿、北派は林耀華、華西大学は李安宅、任乃強、四川大学は胡鑑民である。この時期に華西学

派の三大特徴が形成された。一は、あらゆるものを同時に受け入れたことで、伝播論や歴史学派、フランス社会学派、機能主義、知識社会学などがある。二は、歴史の進展が強調され、史と誌、実際の歴史と口頭の歴史がともに重視されたこと。三は、「経世致用」（国家を治めるための実用）、応用人類学である。

第三段階は、華西学派の継続発展期（一九四六～一九五二）で、この時期の学者および成果の研究は、基本的に誰も行っていない。

総じていえば、現在、国内外の華西学派の理論体系についての研究は、華西学派の学者たちの理論や成果がまとめられ、やや詳しく討論したものもあるが、なお継続研究の余地がある。一に、なお一部の華西学者の理論や成果は研究されていない。ゆえに今後の研究はこの欠落した部分を補充する必要がある、中心人物の理論や成果の研究を継続して展開するだけではなく、その他の人物の理論や成果もともに進めなければならない。二に、総体的な視点の欠如である。結論は

細かく分散しているが、華西学派の理論上の景観が把握されていない。李紹明の文章は高い水準に達しているが、次の段階の思考には至っていない。これが我々に残された後続研究の空間である。

李紹明の総括（華西学派の三大特徴）に沿って研究の筋道を述べれば、第一に、華西学派学者の理論の典拠と新出部分をきちんと分析すること。創出した理論をすべて取り入れた後、学者群全体に影響を及ぼす理論を創出したか、この種の創出は幾らかの新たな理論を提起することができたか、特殊な方式によって様々な理論を結びつけ、整合し、融合させ、文化や下位集団と国家についての分析理論を形成する。第二に、下位集団と地域研究を重点とし、地域内外の様々な文化間の相關的過程の研究に注目する。それは構造や変遷、社会組織、国家が内包するものに関する理論、あるいはある種の共通する価値傾向をもつ観点の集合である。

華西学派が自己の理論体系をもっているか否かは、なお研究を俟たなければならない

らない。しかし、既存の華西学派の理論についての研究および華西学派の歴史沿革について整理すれば、少なくとも華西学派の特色ある理論の構築には次の基礎があることがわかる。

(1) グラハムが導入した仕事…「学科が支える」基礎を提供

(2) 時局（危機、民族主義）…「文化自覚」の基礎を提供

(3) ダイの「除去」作業（キリスト教の中国化）——華西边疆研究学会には中国人が次第に増え、会長にも選出され、中国人研究者が華西の人類学や社会学研究の主導権を得、中国人研究者の台頭は華西学派が形成する最も重要な部分と

なった…「言語権」の基礎を提供

(4) 康蔵地区に対する専門的な研究…「特殊性（中国化）」理論の研究を提供

(5) 華西学派理論の歴史学的特徴…グラハムは正統の人類学歴史学派の学者として、華西学派の理論体系の構築のために「歴史」という重要な転換——歴史の特殊性、文化の相対性、下位集団の平等性をもたらした。しかし歴史学派の歴史は「スローガン」式の歴史（ボアス、ベネディクト、ミード）である。好都合なことに次に登場した中国人学者の一群は、「実際の」歴史によってこのスローガンを補填した。

人類学・社会学の教学実践からみた 民国期の四川大学と華西学派の関係

李沛容

先人の研究の中で、王東傑「學術「中心」與「辺縁」互動中的典範融合——四川大学歴史学科的發展一九二四—一九四九」（『四川大学学報』二〇〇六年第四

期）および聶蒲生「抗戦時期四川的社會学研究と人口学研究」（『貴州師範大学学报』二〇一〇年第四期）は、四川大学の人類学・社会学の發展にふれ、続いて李

紹明「略論中國人類學的華西学派」（『廣西民族研究』二〇〇七年第三期）は、華西学派は当然、当時の成都の四川大学等の機関の人類学・社会学の学者を含む、なぜなら彼らの學術活動は華西と不可分の關係にあつたからだ、とする。

本報告では、四川大学の人類学・社会学が華西学派と關係があつたか否か、あつたとすればどのような關係だったのかについて整理する。この問いに答える前に、まず、四川大学の人類学・社会学の發展状況について述べる。国立成都大学ができる前、国立成都師範大学や公立四川大学には歴史系に人類学・社会学の課程が開設されていた。一九三一年国立四川大学ができる前にも、文学院の歴史系と教育系、および法学院の政治経済学系には人類学・社会学の課程があつた。歴史系は人類学・社会学についていえば、教学の主旨は、自民族および各民族の由来、今日に至るまでの發展および滅亡の過程、各民族の盛衰の原因や興隆の軌跡を明らかにし、人の生活によって歴史の進展を述べ、その目的とは何かを調

べることにある。人類の進展はその目標からみればなお途上にあるが、民族の生活は、政治、社会、文化の学説および産業の技術においてはどの段階にあるのか、他民族と比較して優劣はどうなのか。一九三六年の歴史系の教学主旨から読み取ることができるのは、当時の民族史や民族関係、政治社会文学の学説など各方面に表出されていることは、今日の歴史系の主旨とはあまり一致していないということである。

当時の課程の綱要は、以下のようである。

- (1) 上古史…週三時間、一学年、六単位、担当教員…楊筠如、目標…略述「前史の社会と民族分布の状況」、略述「商周の兩族の發達の歴史と政治文化の要点」
- (2) 唐五代史…週三時間、一学年、六単位、担当教員…祝豈懷、目標…異民族と唐の關係
- (3) 宋遼金元史…週三時間、一学年、六単位、担当教員…張雲波。この課程は中史組の断代史研究の一で、内容は宋遼金西夏および元の相互關係、遼元民族の

来源、宋遼金元各民族の変遷、遼金元の特殊制度、遼金元の漢文化に対する關係とその固有の文化。

- (4) 先秦史…週四時間、一学年、八単位、担当教員…丁山、考古学人類学等を学ぶ。地下に埋藏された文物史料を研究し、書籍や伝聞の古代の事を実証し、先秦民族の分布状況および各民族文化の發展關係を考証する。

史学系における人類学・社会学の教学計画…第三学年と第四学年の中史組と西史組には社会学人類学の選択課程が設けられた。

- 人類学課程…週三時間、一学年、六単位、担当教員…胡鑑民。この課程は文化人類学を上下に分けて教える。上編は文化人類学上の一般的な問題、文化起源や文化モデルの地理的分布、支配文化モデルの要素等。下編は原始（原初）の經濟生活、家庭と婚姻制度、政治法律と風俗習慣および信仰芸術言語と原初民の心理。

四川大学社会学人類学系の創設の背景…一九三五年、任鴻雋が校長になって「国

立化」「現代化」が進められ、一九三五～一九三六年にはラドクリフ・ブラウンが中国に招かれて講演、また李濟や呉文藻、晏陽初なども四川大学で講演し、聞宥が四川大学に招聘された。

四川大学はなぜ社会学人類学系を設置しようとしたのか。社会組織とその進展は人文学科が研究しなければならないテーマであるが、同大学は地理的に康藏滇黔（旧西康、雲南、貴州の各州）に近く、辺疆各民族を研究するのに天然の利があり、将来学部を設置したら、一般的な社会現象を研究する以外に、辺疆民族の特性や言語文字、社会組織、習俗等を研究し、各族の団結と辺疆開發の参考になる。しかし、一九三七年にこの新たな視野をもった校長は離任し、四川大学に社会学人類学系が設置されることはなかった。一九三九年、四川大学は校地を変更したため華西学派とのより密接な關係を失った。

最終的に学科の設置には成功しなかったが、幾つかの研究機関が設置された。例えば西南社会科学院については、「任

鴻雋による蔣介石への報告」に設置目的が次のように述べられている。教員と学生が課外時間を使って社会の各種問題について実地調査と研究を行い、理論を事実と関係づける。経済組と人文組の二つに分け、前者は経済の発展状況や文化指数を調査し、後者は辺疆の民族を研究し、蜀（四川）の文献を収集し、蜀の金石文物について考察する、と。

同時に、学生の學術団体は活発だった。例えば社会問題研究会、史地研究会（西南民族研究会、西南辺疆研究組等）、中国辺疆問題研究会四川大学分会である。学校の社会化は近代教育の目標の一つであったが、中国の学校は社会とは大きく離れており、この隔絶を解消するために、社会服務が重んじられた。四川大学では、学生の能力と興味に合わせて社会調査社会服務に参加させた。例えば辺疆服務団は、夏休みに学生が雷波や馬辺、屏辺、峨辺（涼山彝族自治州の彝族居住区）に行き、辺民の生活を調査した。農村に深く入って農民經濟教育について考察した村落調査団は、大学周辺の

非識字者三百余人を收容して抗建国策の七カ所の小学校にいられたこと等、みなその成績は非常に優れて客觀的である。

学理は伝承され、馮翰と指導を受けた学生の論文は、四川大学歴史系では以下の二篇で、民族史の傾向がみられる。

「趙爾豐改流與西康建省」「四川獐獠考」「英藏外交關係之史的研究」「西藏民族」「近代新疆史略」「趙爾豐與西康」「明代太監用事起源考」「殷商民族之研究」「明末之党争」「南北朝社会之風俗習慣」「秦統一天下及其在歷史上之重要性」である。

華西協合大学社会学系は五一篇を指導した。以下は一部であるが、民俗学の傾向がみられる。「五屯嘉絨之婚葬礼儀季節活動」「四川省華陽縣客家族之研究」「四川民社」「康藏民俗」「神話伝説與四川社会」「社会與医学」「中国图腾社会研究」「成都祠堂之研究」「成都娼妓問題之研究」「成都旧式婚姻之研究」などがある。

今後の研究項目は以下のようなものである。

(1) 史学系人類学、社会学、民族史、教育学系社会学、社会心理学、農村教育、政治經濟学系社会学、社会問題、辺

疆問題等の課程の設置およびその教学目的を分析する。

(2) 西南社会科学研究処、四川大学辺疆研究学会等の研究団体および社会問題研究会、史地研究会、中国辺疆問題研究会四川大学分会等の学生団体の社会調査研究活動について整理検討する。

(3) 晏陽初、李濟、吳文藻等人類学・社会学者の講演活動や、大学研究者間の學術相互訪問と兼任、四川經濟調查団や辺疆服務団を組織して参加したという史実に關して分析する。

(4) 胡鑑民、聞宥等が四川大学で教授していた時の人類学・社会学領域の治学思想と教學理念を分析する。

(5) 文科の卒業論文から、四川大学の人類学・社会学の教學成果と學術伝承を分析する。

華西学派と嘉絨研究

鄒立波

華西学派における嘉絨（ギャロン・チベット族）研究に関する資料は、次の三点に大別される。

（一）エドガーと華西学派の嘉絨地区早期研究

エドガー（葉長青 J. Huston Edgar, 1872-1936）は、内地会華西边疆地区伝道の先駆者で、王室アジア分会中国支部会員、英国王室地理学会会員、華西边疆研究学会創始者の一人で唯一の名誉会長。一九二二～一九三六年は打箭炉（現在の康定）に居住。

エール大学神学院図書館所蔵の華西边疆学会檔案の早期研究の特徴は、宗教信仰と歴史研究の偏重、言語文学の重視の二点である。エドガーは嘉絨語の研究を重視し、最も早く「英嘉絨詞彙表」を作成して二四〇〇の語彙と単語を収集し、雍仲（Yung Drung）のボン教ラマ協力という名を得た（J. H. Edgar, “English-

Giarung Vocabulary”, *Journal of the West China Border Research Society*, Vol. 5, 1932）。

『華西边疆研究学会雜誌』所収のエドガーの嘉絨研究論文は、「笨教或喇嘛教黑派小記」第三卷 一九二六～一九二九年、「金川種族派別」第五卷 一九三二年、「笨教真言與笨教信仰」第五卷 一九三二年、「金川民謡」第五卷 一九三二年、「丹巴的拜神節」第五卷 一九三二年、「瓦寺的第一位王子」第五卷 一九三二年、「打箭炉地区山脈概述」第五卷 一九三三年、「雅拉名考」第六卷 一九三三～一九三四年、「四川古代戎人及可能存在的後裔」第六卷 一九三三～一九三四年、「金川日月崇拜」第七卷 一九三五年、「西藏黑教記述」第七卷 一九三五年である。

（二）「川西調査」と華西学派の嘉絨地区研究

一九四一年七月～八月、学生夏季边疆服務団は、黒水や理番（現在の理県）、

馬塘等の地で、文化、地理、経済、農業を調査し、王文蒙・葛維漢・白雪等編『川西調査記』（教育部蒙藏教育司、一九四三年三月）を刊行。構成は、羌人の部（葛維漢）、戎人の部（聞宥等か。なお理番県は雜谷腦に属し、東五屯の屯民は嘉絨とよばれ、自称は格勒、漢人の近くに住む人の意味）、地理の部（劉恩蘭）、経済の部（李有義）、農業の部、動物の部（華西協合大学生物系）。特徴は、多くの学科の共同調査であつたこと、教学と研究が同時に行われたことである。

研究成果には以下がある。

李有義「雜谷腦喇嘛寺的經濟組織」『辺政公論』一九四二年第一卷第三～四期、「雜谷腦的漢番貿易」『西南边疆』一九四二年第一五期。

聞宥（一九〇一～一九八五）は、一九三七～一九五四年には国立四川大学や華西協合大学で教え、一九四〇年華西協合大学中国文化研究所所長。論文は「論黒水羌語中之 Final Plosives」『華西協合大学中国文化研究所集刊』一九四〇年第一卷第一期、「論八什腦 Jyarung 語動詞中

之人称後置(附表)、『華西協合大学中国文化研究所集刊』一九四〇年第一卷第四期、「理番語言」、『華西边疆研究学会雜誌』一九四二年第一四卷、「嘉絨語動詞之方向前置及其羌語中之類似」、『華西協合大学中国文化研究所集刊』一九四三年第三卷第一一四期、「論嘉絨語動詞之人称尾詞」、『中国文化研究彙刊』一九四四年第四卷下、「理番後二枯羌語音系」、『中国文化研究彙刊』一九四五年第四卷。

劉恩蘭(一九五〇—一九八六)は、一九四〇年から成都金陵女子文理学院地質地理学系教授兼主任、一九四三年華西边疆研究学会会員。論文は「理番的地理」、『華西边疆研究学会雜誌』一九四二年第一四期、「理番的地理概況(附图)」、『西南边疆』一九四二年第一四期、「理番県之水土保持問題」、『辺政公論』一九四二年第一卷第九一—一〇期、「川省西北土地利用之地理条件」・附表「文化先鋒」一九四三年第二卷第一五期、「四川西北理番民族概況」、『華西边疆研究学会雜誌』一九四四年第二五卷、「理番県土壤概況」、『辺政公論』一九四五年第四卷第九一—

二期、「談川省西北辺胞」、『婦女文化』一九四六年第一卷第五期、「訪草坡官寨」・川西遊記之五「文化先鋒」一九四六年第六卷第七期、「遊記・羅族雜居之理番県」・川西遊記之五「文化先鋒」一九四六年第六卷第九一—一〇期、「遊記・羌民戎官の九子屯」・川西遊記之六「文化先鋒」一九四六年第六卷第一四期、「四川西北区民族之検討」、『新中華』一九四六年第四卷第一〇期、「在理番県城」・川西遊記之五「文化先鋒」一九四六年第六卷第一一期、「松理茂汶の紹介」、『边疆服務』第一卷第二期、「理番四土之政治」、『辺政公論』一九四八年第七卷第二期、「理番四土之社会」、『辺政公論』一九四八年第七卷第三期。

(三) その他の研究

(1) 李安宅「川甘数県辺民分布概況」、『新西北月刊』第四卷第二一六期、第五卷第四一六期、「辺政公論」一九四一—一九四二年第二卷第九一—一〇期
(2) 一九四三年一月—三月、社会学系の蔣旨昂教授は、于式玉と理番県で募集した十数名の小学校教師とともに黒水に

赴いた。蔣旨昂(一九一一—一九七〇)は、一九四一年から華西協合大学社会学系で教え、一九四二年に華西边疆研究学会に入会。論文は、「黒水頭人與百姓」、『大学』一九四四年第三卷第三一四期合刊、「黒水的政治」、『華西边疆研究学会雜誌』一九四四年第一五卷一九四四年第三卷第二期、「黒水流域社区的政治」、『華西边疆研究学会雜誌』一九四四年第一五卷。

于式玉(一九四〇—一九六九)は、一九四二年から華西協合大学華西边疆研究所に勤務。論文は、「麻窩衙門」、『辺政公論』一九四四年第一八卷第一〇期、「記黒水旅行」、『旅行雜誌』一九四四年第一八卷第一〇期、「黒水民風」、『旅行雜誌』一九四五年第六卷第五一六期、七一八期。

(3) 任乃強(一八九四—一九八九)は、一九四二年から華西協合大学華西边疆研究所に勤務。論文は、「天蘆宝谷記」、『康導月刊』一九四五年第六卷第五一六期、七一八期、「天全土司世系」、『康藏研究月刊』一九四九年第二六期、「四川第十六

区民族之分布」『康藏研究月刊』一九四九年第二四期。

(4) 馬長寿（一九〇六一一九七一）

は、論文は「川康辺境之民族分布及其文化特質」（金祖孟との共著）『青年月刊・边疆問題』一九三九年第三期、「笨教源流」『民族学研究集刊』一九四三年第三期、「嘉戎民族社会史」『民族学研究集刊』一九四四年第四期。

(5) 一九四五年夏、燕京大学社会学系はアメリカの羅氏基金委員会とハーバード燕京学社の基金を得、林耀華と陳永齡に委託して七月〜九月の二カ月間調査を行い、『四土嘉戎』を刊行。論文は、林耀華「川康北界的嘉戎土司（附図）」『边政公論』一九四七年第六卷第二期、「川康嘉戎的家族與婚姻」『燕京社会科学』一九四八年第一期、陳永齡「四川理県藏族土司制度下的社会」『民族学浅論文集』台北弘毅出版社、一九九五年。

〔付記〕翻訳は李紹明「中国人類学における華西学派」を飯田直美が、その他は松岡正子が担当した。